

聖徒の道

12 1975

その名は、「靈妙なる議士、大能の神、とこ
しえの父、平和の君」ととなえられる。

（イザヤ9：6）



1975年 12月号

末日聖徒イエス・キリスト教会

もくじ

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイブレー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

ロバート・D・ヘイルズ
(内務伝達部長)
ジョン・E・カー
(配送翻訳部長)
ドイル・L・グリーン
(教会誌編集主幹)
ダニエル・H・ラドロウ
(教会教課企画調整主任)

国際機関誌編集主幹

ラリー・ヒラー
ロジャー・ギリング(デザイナー)
日本語コーディネーター
八木沼 修一

アブラハムの模範	スペンサー・W・キンボール	529
あてもないところに		533
マリヤとヨセフ	ロバート・J・マシューズ	535
クリスマスの精神	トーマス・S・モンソン	539
よげんしゃの たんじょうび		541
山の中の日よう学校		542
チロルのうた		543
大管長会から せかいのこどもたちへ		544
その夜、世界は しずけさにつつまれ	ドロシー・レオン	546
おもちゃばこ		548
日々の恵み		549
宣教師の母	ペトラ・G・デ・ヘルナンデス	552
影響を与える人々	ウィリアム・G・バンガーター	554
自由意志	ロバート・D・ヘイルズ	556
よい息子を持った母	アドニー・Y・小松	558
証に锚をおろす	ジョセフ・B・ワースリン	558
ローカル・ニュース		560



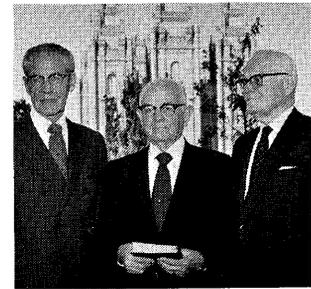
P. 535



P. 541



P. 542



P. 544

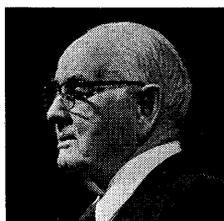


P. 547

聖徒の道 12月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・
センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間子約 1,700円 1部 150円
海外子約 2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan



アブラハムの模範

アブラハムは家庭を管理する模範を示した

1823年9月21日、天使モロナイは、ニューヨーク州マンチェスターのジョセフの父の家で、予言者ジョセフ・スミスに現われた。そのときの啓示に、天使はマラキ書第4章の予言をこう引用した。「見よ、主の大なるおそるべき日の来る前に、予言者エライジャの手によりて、われ神権を汝に顕さん。」(ジョセフ・スミス2:38) 2,300年ほど昔に告げられたこの予言は1829年の初夏に成就し、ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの3人からメルケゼデク神権を受けた。この3人については、教義と聖約に、「わが汝らに遣わして、汝らを聖職に按手任命し汝らの使徒たること、また汝らがわが名の特別の証人たることを確認し」(教義と聖約27:12)と記されている。

「神の御子の神権の聖なる神権」(教義と聖約107:3)と呼ばれたメルケゼデク神権の回復は、この神権時代における人間にとってこの上なく重要な出来事である。神権は人の救いに関わるすべての事柄を執り行なうために地上の人間に委任された神の権威、権能である。それは、主が人を動かして人の身と霊を救うための手段である。この神権の力なくして人は救われない。この力によってのみ、「教会員のすべての霊に属ける祝福の鍵を保ち」、「天の王国の奥義を受くる特権を有し、諸々の天は開かれ」(教義と聖約107:18、19参照)、新しくかつ永遠の結婚誓約に入り、妻子と永遠の絆で結ばれ、永遠に子孫の族長となり、主の祝福の完きを受けることができるのである。

愛する兄弟姉妹、神権の召しを雄々しく果たす人々に、いかに大きな祝福が約束されているかをしばし考えていただきたい。「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得、而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは、『みたま』により聖められてその肉体再新さる。これらの者はモーセの息子たちとなり、アロンの息子たちとなり、アブラハムの子孫となり、また教会員にして王国の民となり神の選民となる。」(教義と聖約84:33、34)

神の選民! しばし考えてみれば、妻子と共に神の選民になるに値するとしたら、そのためにはいかなる犠牲も惜しくないことを知るはずである。しかし、この大なる祝福の約束には条件がある。条件のないものはひとつとして

ない。復活すらそうである。私たちは前世で、不死不滅の体を授かるに必要な資格を得なければならなかったのである。

そして、あらゆる祝福は忠実さにかかっている。人は条件付きの約束を受けて神権に聖任され、忠実を条件に神殿で結婚し、結び固めを受ける。私の知る限り、世には忠実なくして受けられる祝福はない。

神権に忠実な者とは、「召を全力を尽して遂行し」、「神の口より出るすべての言によりて」(教義と聖約84:33、44)生き、それによって誓約を完うする者である。この資格には、ただうわべだけの従順よりもはるかに深い意味があると思われる。ただ少しばかりの集会に出席して責任を通りいっぺんに果たすことでなく、はるかに多くのことが求められる。体と霊との完成が含まれ、平常の義務という感覚をはるかに越えた奉仕も含まれるのである。「見よ、召さるる者は多けれども選ばれる者は少し。」(教義と聖約121:34)

キリストは、忠実な神権者の至高の模範である。聖典を調べると、この無上の模範者に従って、神権に約束された祝福にあずかるにふさわしい者となった大勢の人々の話がある。そのひとりが父祖アブラハムである。アブラハムの生涯は、家族の立派な族長になりたいと願う教会員の父たちの心を、鼓舞し高揚する模範である。

私たちは聖典の中からアブラハムの性格について幾ばくか知ることができる。彼は聖なる神権を通して得られる大いなる祝福にふさわしくなろうと、忠実に努力を重ねた。

「また、わがために更に大なる幸福と平安と安息とあるを知りたれば、われは先祖の祝福と、この祝福を他に施す職に按手聖任されんこと乞い求めたり。而して、われは義に随う者なりければ偉大なる知識ある者たらんと望み、義に随う更に大なる者たらんこと、また更に偉大なる知識を持ち多くの国民の父、平和の君たらんことを望み、また数々の教えを受けんこと、神の誠命を守らんことを望みたれば、われは先祖に属ける権能を保つ正当の世嗣、大祭司となりたり。」(アブラハム1:2)

アブラハムの家族は、「彼らの義……より背き」(アブラハム1:5)、偶像崇拜を行なったが、彼は忠実な者の



ために備えておかれた祝福を知り、神の戒めに従おうと熱心に努めた。彼は「神より命ぜられたることの外何事をも」(教義と聖約 132:37) 行なわず、その従順さによって神にふさわしい者となった。アブラハムの従順さとそれに伴って受けた祝福は、主が聖典全体を通じてご自身を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼ばれたほどであった。(例: 出エジプト 3:6、ここで主はそう名乗っておられる。)

アブラハムが主のみこころに従順であったことには、数々の例がある。創世記では、神はアブラハムに、家の中の男子全員に割礼を施すよう命じておられる。アブラハムはその命令を受けたとき、「はい、主の命令に従います。しかし羊を別の野原に連れて行って、テントの修理をしなければなりません。今週の末か、遅くとも来週の初めには行ないます」とは答えなかった。彼は従うことを引き延ばさず、すぐに行って「この日」(創世17:26) 割礼を受けた。

それと同様に、いやそれよりももっと印象的なのが、ひとりの息子のイサクをいけにえに捧げよという神の命令に対する彼の従順である。アブラハムはこれを受け入れ難い事柄として避けることも、また、完全に無視することさえもできたはずであるが、そうはせず、翌朝早く起きて言われた場所へ出かけて行ったのであった。

主のみこころをなすために、早起きをする教会員はどれだけいるだろうか。「はい、家庭の夕べはします。でも子供たちがまだ小さいので、もっと大きくなってから始めるつもりです」と、私たちはどれだけ言うことか。「はい、食料貯蔵や人を助けることという戒めに従います。ただ、今は時間もお金もないのでもう少し後で……」と、どれだけ言うことか。ああ、なんと愚かな人々よ! 引き延ばしているうちに、刈入れは終わり、救いを受けられなくなるであろう。今こそアブラハムの模範に従うときであり、今こそ悔い改めるときであり、今こそ神のみこころにすぐさま従うときである。

アブラハムはまたほかの意味でも大きな模範である。一例を取れば、万事に忠実であった彼は、家族のために啓示を受けることができた。実際、彼はたびたび主と「顔と顔とを合せて」(アブラハム 3:11) 語っている。啓示の祝福は、だれしもが求めるべきものである。義しい人ならば、家族を導き、その他の責任の助けともなる啓示の「みたま」を、自分が受けていることを知っている。しかし私たちはアブラハムのように、自分の生活を整え、常によく主と語り合い、主をよく知ることによって、そのような啓示を受けるにふさわしくなろうと努めるべきである。

アブラハムは万事について主のみこころを行ないたいと願って、自分の家族を義しく治めた。ほかの様々な責任もさることながら、子供たちに模範を示して福音を教えるということに失敗したならば、自分の受けた最も大切な管理の職を果たさないことになることを、彼はよく知っていた。アブラハムの家庭での模範と教えは、主がこのように言われたほどであった。「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。」(創世18:19) 「父よ、あなたは正しい道を歩んでいるか」というパンフレットにこうある通りである。

「父親は指導者です。それも最も大切な指導者です。そ

れは過去においてもそうでしたし、将来も変わらないでしょう。あなたは家庭にあって管理する人です。これはふさわしいからとか資格があるからとかにかかわりなく、神が定めた律法であり神との約束なのです。食卓で祈りを捧げるとき、また家庭の夕べのときにあなたは家庭を管理します。そして主の『みたま』の導きにより子供たちが正しい原則に従って教えられているかどうかを見届けるのです。

あなたは家族に祝福を与えます。また子供たちをしつけ、いろいろな規則を教えるにあたり、あなたは積極的な役割を果たします。あなたは指導者として、一致と愛に満ちた家庭に与えられる祝福を受けられるよう計画し、犠牲を払わなければなりません。これを達成するには、生活を家庭中心に変えていく以外にありません。」

父親母親の第一の責任は自分の家庭にある。夫婦が協力するときに、主が望んでおられるような家庭ができる。お互いに、また子供たちに愛と思いやりを示すことで、決して渴くことのない霊的な力が蓄えられるのである。

しかし、子供たちのためにその霊の貯水池を造らず、別の水源だけに頼っている家族もある。彼らは日曜学校やセミナーに頼るが、そのようにして造られる貯水池はすきまや穴だらけの石と木と枝でできたダムのように、洪水にはわけなく流されてしまう。教会の補助組織は非常に大切であり、私たちはだれもがその祝福にあずかるべきである。しかし、子供にイエス・キリストの福音を教えるという親の責任を、それに肩代りさせてはならない。決して肩代りさせてはならない! アブラハムは息子イサクのために強固な霊の貯水池を、決して干上がることのない貯水池を造った。そのイサクが旧約聖書の偉大な族長のひとりになったことを私たちは知っている。

ジョセフ・F・スミス大管長はそのことについて、私たちに貴重な勧告を与えている。「心の中に神のみたまを宿しなさい。霊と力により、実践によって……子供に教えなさい。あなたが熱心であって、教えることを自らも実践していることを子供に見せなさい。これらを専門家に任せず、あなた自身の説教と模範により、炉辺で子供に教えなさい。あなたが真理の専門家になりなさい。単なる指導教師でなく、集会、学校、組織を自分のものとし、それらを家庭における私たちの教えと訓練を補うものとしなさい。」(福音の教義 第2巻 p.37) 私たちはこの勧告に従おうではないか。そうすれば主は私たちの努力を喜ばれ、私たちは真心をもって義務を果たすことからたらされる平安を知るのである。

だが私たちは、正しい行ないを家庭だけに限ることはできない。隣人の祝福となることはできる限り行なうべきである。隣人に対する私たちの責任のひとつが伝道である。アブラハムはこの点においても模範であった。主はこう言って彼を召された。「われ汝をハランの地より携え出して、外国にわが名を持ち行く導きと教えを施す者となさんとすればなり。」(アブラハム 2:6) すでに隣りに福音を証していたアブラハムは、新しい土地へ旅し、福音を説くようにという召しを受け入れた。家族と「ハランにて得たる人々」と共に出発したのである。

主は、ちょうど4千年の昔に、僕アブラハムを宣教師に召されたように、現在も聖徒たちを召しておられる。私たちは全員が宣教師でなければならない。また、息子たちに専任宣教師となるための準備をさせなければならない。福





音を伝えようと幾らかでも努力したことのある人は、この世の兄弟姉妹に福音を分かち喜びを証することができる。福音を広める私たちの努力は、まだあまり成果をあげていない。私たちはもっと行なわなければならない。アブラハムのように、世に福音を宣べ、ただ口で言うにとどまらず、福音に従って生活することによって、人々に真理を示さなければならぬのである。

私たちは悔い改めと赦しのもたらす平安を経験し、その平安を世に告げなければならない。義の模範者アブラハムは、兄弟たちの間に平和を求めた。彼はロトにこう言った。「わたしたちは身内の者です。わたしとあなたの間……争いがないようにしましょう。」(創世13:8) 身内で平安を見出したからには、私たちは忍耐と思いやりと柔和と、会うすべての人にキリストの純粋な愛を抱くことによってそれを分かち合うべきである。

そのような平安は誠実によってのみ得られる。神と誓約を交わしたならば、何としてもそれを守るべきである。規律を守ると約束しながらその誓いを破って、いつまでもかくしおせるかを試す学生のようにはならないようにしようではないか。2年間主に仕えたと約束しながら、怠惰と言い逃れで時間を浪費する宣教師のようにはならないようにしようではないか。朝に聖餐を受けながら、午後には掃除をしたり、テレビを見たり、奉仕の時間を後回しに昼寝をしたりして、安息日を汚す教会員のようにはならないようにしようではないか。私たちはアブラハムのような誠実さを持って、神と交わした厳かな誓約を真剣に守ろうではないか。

「時にソドムの王はアブラハムに言った、『わたしには人をください。財産はあなたが取りなさい』。アブラハムはソドムの王に言った、『天地の主なるいと高き神、主に手をあげて、わたしは誓います。わたしは糸一本でも、くっひも一本でも、あなたのものは何も受けません』。」(創世14:21-23)

ソドムの王はアブラハムと主との誓約のことがわからなかった。アブラハムは王の財産をもらって金持になることもできたが、すでに誓いを交わして、彼はその誓いを破る気持がまったくなかった。ああ、神の子供たちが皆そのように誠実であったならよいものを!

アブラハムはあらゆる点で神に誠実であった。よく引用されるのは、アブラハムが神に「すべての物の十分の一」を捧げたことである。アブラハムが義しいことをするのは、

自分たちよりも簡単だったと思う人はいないだろうか。心中、アブラハムには主の特別な力添えがあったから、偉大な義人になれたのではないかと考えはしないだろうか。それとも、もし神のことを第一にして生活したならば、だれでもアブラハムのようになれると、考えているだろうか。私は皆さんに証したい。その勇気のゆえに今は「最高の栄に進むを得てその王座に坐」している(教義と聖約132:29)アブラハムのように、私たちもなれるのである。その昇栄は、教会幹部あるいはステーク部長、定員会会長や監督だけに与えられる祝福であろうか。そうではない。それは、自分の罪を捨て、聖霊の導きを得て生活し、アブラハムの模範に従って自分を備えるすべての人のための祝福である。

教会員がアブラハムのような誠実さ、従順さ、啓示、信仰を持ち、奉仕を行ないさえしたならば! 両親がアブラハムの求めた祝福を求めたならば! 彼らはアブラハムが受けたような啓示と誓約と約束と永遠の報いをも受けることができるであろう。

父よ、あなたは家族のことをどのように報告するでしょうか。「生ける神への信仰を培い、よく学ぶように勧め、秩序と従順と犠牲を教えるような雰囲気や家庭の中に造ったと報告できるでしょうか。また奥さんと子供たちに、天父が生きてましまし、真の教会が回復されたことを証したと言えるでしょうか。そして生ける予言者に従ったと報告できるでしょうか。そして最後に、あなたの家族が、小さな子供たちにとって安らぎの場であり、両親の温かい愛と関心を受けるところであったと言えるでしょうか。」(「父よ、あなたは正しい道を歩んでいるか」)

ステーク部長とメルケゼデク神権定員会会長にお願いする。父親と定員会の会員が、父親という召しの重要性を認識するように靈感を与え指導していただきたい。また全教会の神権者をお願いする。自分の王国、すなわち自分の家庭に立ち返り、親切と正義公平をもって、神に従うよう家族に靈感を与えていただきたい。そして母親たちをお願いする。義をもって夫に従い、夫が霊的に高くなるよう力づけていただきたい。

遅すぎることがないように、今行動しなさい。今が、明日、そして来週、来年の進むべき道を定める時である。今が、アブラハムのように主に従い、物事を一寸延ばしにせず、犯した罪を悔い改め、守っていなかった戒めを守り始める時である。安息日には必ず神権会と聖餐会に出席し、什分の一を正直に納め、実際に教会幹部を支持し、教会プログラムを支援し、神殿にしばしば参入し(遠い人はできる限り)、組織で奉仕し、積極的な行いと健全な態度を持つよう、今決意しなさい。

アブラハムが神権の召しを自ら求めたことを忘れてはならない。彼は神がやってこられるのを待ちはしなかった。祈りと従順な生活によって、神のみこころを知ろうと熱心に求めたのである。そこにこそ、主が帰還宣教師と独身男女全員に与えられるチャレンジがある。「この故に汝行きてアブラハムの業を為せ。」(教義と聖約132:32)

アブラハムの模範に従うとき、私たちは恵みに恵みを加えられて成長し、さらに大きな幸福と平安と安息を見出し、神と人から愛されるであろう。彼の模範に従うとき、私たちは家族と共に、今も永世にもわたって、喜びを得、達成感を味わうことだろう。



さし絵：ジェームス・クリステンセン

あてもないところに

夜明けも近いというのに、まだ闇に包まれていた。そんな時刻に、汽車は水を補給するため引込み線に入って止まった。見わたす限り町の影はなく、ただ山と密林のおぼろげな輪郭が見えるだけだった。汽車がポーと蒸気をふかしてまた線路に戻ろうとしたとき、客車の座席にいた背広にネクタイ姿のメキシコ青年が、アメリカ人の連れをふいにひじでつついた。

「かばんを取って。さあ、降りますよ。」

まだ眠たげな友だちのおぼつかない抗議を耳に入れず、青年は彼をせかして、朝の4時の冷気の中、線路のわきに降り立った。汽車はシューッと蒸気を吹き、ポップポップとスピードを増してぐんぐん遠ざかっていった。やっと目のさめた連れが目を疑うように、「まだ夜中ですよ。いったいどこなんですか、あてもないのに。次の汽車はあすの朝までないんですよ」と言った。「わかってますよ」と、若いメキシコ人は答えて、「でも、みたまが降りる

ようにって教えたんで、それで降りたんですよ。」連れは肩をすくめた。そう言われては返す言葉もなかった。プエブラ地方部の地方部長パーラー長老はなかなかの切れ者で、彼が主に近い生活をしていることはだれもがよく知っていた。

「そういうわけですか。」アメリカ人は平然とした様子で、「さて、どうしますか」と言った。パーラー長老は暗い中を指さして、「まず歩きましょう」と答えた。

彼らは歩き出し、山を登りつめてはまた下った。白み始めた空にまた山が見え、それを越えるとまた山だった。彼らはその山を幾つも越えた。そしてついに、17マイル(約27キロ)も歩いて、ある村に着いた。彼らは近くの小山に登り、讚美歌を取り出して一曲歌った。その歌が終わるとまた一曲、もう一曲と歌い、とうとう村中の人々が、何事かと様子を見に山を登ってきた。

全員がふたりの宣教師を取り巻くと、ふたりは説教を始めた。彼らは丸半日

も説教を続け、その説教が終わると近くを流れる小川をせきとめ、その場にいた8歳以上の全員にバプテスマを施した。そしてひとりの兄弟を長老に聖任し、新しくできた小さな支部の支部長にして、それから、翌日の汽車に間に合うようにと引き返していった。

現在パーラー長老はメキシコ・ベラクルス伝道部の伝道部長として、南メキシコに帰っている。ベラクルス伝道部はバプテスマ数で全教会の先頭を行き、活発な会員の割合も高く、青少年宣教師プログラムも強力である。

山あいのある小村は、2百人余りの立派な支部となり、1名のフルタイム宣教師を出して、礼拝堂の建築に希望を燃やしている。

村人たちにとっては、ひとりのモルモンの長老がその信仰によって、午前4時にあてもなく急に汽車を降りたことが、人生の大きな岐路となったのである。

マリヤとヨセフ

ダビデの末、恵まれた者、

我らの主の保護者

ロバート・J・マシューズ



マリヤとヨセフの物語は、新約聖書の中に美しく描かれている。しかし、この物語を深く理解するためには、ふたりの生涯についてもう少し知る必要があり、また、ふたりの置かれていた特別な社会環境についても知らなければならぬ。

まず、マリヤがイエスの地上の母であり、ヨセフがマリヤの夫である、ということを知ることが基本となる。マリヤとヨセフが、イエスの地上での父母として、また保護者として選ばれたことの意義を深く考えてみよう。イエス・キリストは、霊的には御父の長子であり、肉体的には、御父の独り子である。そして、これが聖典の全編を貫く主題となっている。アダムを始めとする歴代の予言者たちは、イエスとその使命について証した。イエスは前世ではエホバであった。そして、私たちの天父に選ばれて、全人類の救い主となられたのである。

救い主という地位をもって、イエスは、人の救いに関するすべての事柄において御父を代表しておられた。イエスは、諸々の世界の創造主であった、また、自ら親しく古代の族長や予言者を訪れ、福音の聖約を交わした。アダムを始め、エノク、ノア、アブラハム、モーセ、イザヤ、ニーフアイ、アルマ、その他多くの人々も、イエスについてよく知っており、また、イエスを礼拝した。イエスは、威勢と力に満ちた御方であり、全知全能にして、しかも、優しく慈悲深い御方であった。また昔も今も、「イスラエルの聖者」であり、全地の神である。

イエスは、前世で贖いの業のために選ばれたが、全く同様に予言者たちも、その忠実さに応じて、地上における業のために予任された（アブラハム3：22、23、アルマ13：2-10参照）。またこの前世において、神の忠実な息子、娘たちは、義のうちに最初の教えを受け、イエスに従うようになったのである。さらに、予言者として予任された者もいれば、その予言者の父親、母親、また妻として予任された者がいたことも確かである。

こう考えてみると、マリヤとヨセフがああ創世の以前の大会議において御父からイエスの地上での保護者となるよう選ばれたと信ずることに、何ら不都合な点はない。マリヤには、偉大なエホバをこの世にもたらすという、他に例のない特権と責任が与えられた。これによってエホバは、骨肉の体を得て、死すべき状態を経験し、人類の贖いのためにその業を続けられたのである。

イエスがこの世に誕生されたことは、私たちが認識している以上に意義深いことである。これは、実験的な出来事でもなければ、救いの計画の中で偶発的に起きたことでもない。マリヤの息子であり、同時に御父の独り子であるという、人間性と神の属性を兼ね具えたイエスが、この世に來臨されるということは、必要欠くべからざることであ

た。イエスをおいてほかには、人類が救われる道はどこにもないのである。死すべき体を得、人の特質をその身に受け、罪のない生活を送り、人類の罪の贖いのためにその血を流し、死に、そして骨肉の体をもって死からよみがえられた主のみが、贖いの業を成し遂げることができたのである（アルマ34：8-16、モーサヤ7：27参照）。永遠の正義の原則には、他のいかなる方法も入り込む余地はない。この過程を踏まなければ、またこの贖い主がいなければ、あらゆる人は死ぬとすぐに、「悪魔すなわち悪魔に属する使たちとなって、私たちの神の御前から締め出され、あの偽りを生む親と共に、彼自身のように不幸の中に」（IIニーフアイ9：9）留まるようになるのである。

聖典の中で、マリヤに関する最初の記述は、モーセの書の中に見られる。アダムとイブが罪を犯した後、御父がへびに話しかけられたときのことである。御父は次のように言われた。「また、われ汝と女の間、および汝の子孫と女の子孫との間に怨みを置くべし。彼は汝の頭を打ち砕き、汝は彼のかかとをかみ砕くべし。」（モーセ4：21。創世3：15と比較せよ）

地上における救い主の母親に関する直接の記述は、紀元前約700年頃のイザヤの言葉の中にある。「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。」（イザヤ7：14）新約聖書を読むと、これが、マリヤとイエスの誕生に関する予言であったことがはっきりとわかる。（マタイ1：22、23参照）

ニーフアイ人は、この真理をさらに簡潔な言葉で表現している。イエスの誕生に先立つことおよそ600年前、ニーフアイは次のように言っている。

「ナザレの町もまた見えた。そして私はナザレの町の中に一人の処女を見たが、それはまことに色が白く美しい処女であった。

この時私は天の開くのを見たが、一人の天使が天降ってきて私の前に立ち、……

天使は『見よ、今汝が見る処女は肉体に宿りたもう神の子の母である』と教えて下さった。

私が眺めると、その処女がまた見えてこのたびは一人の幼児を抱いていた。

天使が私に『神の子羊、まことに永遠の父なる神の御子を見よ……』と仰せになった。（Iニーフアイ11：13、14、18、20、21）

その後、救い主の誕生に先立つこと124年前、ベンヤミン王は、ひとりの天使の訪れを受けたことを告げ、また、この贖い主は「神の御子、天地の父、創世の時から万物を造りたもうている造り主イエス・キリストと呼ばれ、その母はマリヤと呼ばれる」（モーサヤ3：8）と説明した。

さらにその後、主の誕生の80年ほど前、アルマは民に次

のように教えた。「神の御子は私たちの先祖の地であるエルサレムのあたりでマリヤから生れたもう。マリヤは神の能力に覆われ、聖霊の力によって懐妊し、男の子すなわち神の御子である方を生むはずの処女であって、選ばれた貴い器である。」(アルマ7:10)

マリヤに関する記述は、このように詳細を極めているが、もし彼女が前世でこの召しに選ばれていなかったとしたら、これほど前から知らされることは不可能であったに違いない。

地上における主の両親を選ぶにあたって、もうひとつの要因がある。主はダビデの家系に生まれ、ダビデの王位の継承者でなければならなかった。主は、ユダヤ人自身の律法によって、文字通りユダヤ人の王となるはずであった。イザヤはこの点に触れて、次のように言っている。

「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる。

そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、ダビデの位に座して、その国を治め、今より後、とこしえに公平と正義とをもって、これを立て、これを保たれる。」(イザヤ9:6-7。イザヤ11:1、教義と聖約113:1-2をも参照)

イエスの父親はこの世の人間ではなかったために、当然ダビデの血筋は、母親を通してもたらされるはずであった。このために、マリヤが地上に生を受けたとき、その血筋を息子のイエスに伝えることができるよう、彼女自身も王家の血統に生まれたのであった。マリヤがダビデの子孫であったことは、聖典の中にはっきりと述べられている。イエスはたびたび「ダビデの子」と呼ばれたが、イエスは、この称号をあえて否定しようとはされなかった。

パウロは、イエスが血統的に王家の血筋を引いていたということを明言している。ローマの聖徒たちに、次のように書き送っている。「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ…」(ローマ1:3) また、テモテに対しても「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思いなさい」(IIテモテ2:8。使徒13:22-23、2:30をも参照)と言っている。

ヨセフもまたダビデの子孫であった。これも、やはり新約聖書中に明言されている。それによると、ヨセフはベツレヘムの出身で、「ダビデの家系であり、またその血統であった。」(ルカ2:4。ルカ1:27、マタイ1:16、20、ルカ3:23-31をも参照)

そのようにイエスは、ヨセフとは血脈が通じていなかったにもかかわらず、ヨセフを通して、ダビデの子孫としての法的な身分を継承したのである。

だが、この時代には、ユダヤ人はローマの統治下にあり、ダビデ家の王位継承権は認められていなかった。ローマから任命されてユダヤ人の王になったヘロデは、イスラエル人でさえなかったのである。

「このとき、もしユダが自由独立の国家であって、正統な君主によって統治されていたとしたら、大工であったヨセフは王冠をいただいてユダの国王になっていたであろうし、その後を継ぐ合法的な後継者はユダヤ人の王、ナザレのイエスであったに違いない。」(「基督イエス」第7章)

無論マリヤは誕生の際、前世での記憶や自分が予任され

たことなどは、完全に忘れ去っていた。しかし、独り子の降臨が間近になると、マリヤはその使命を果たすことができるように、必要な時に必要な場所で貴い血統の下に生を受けたのである。

ルカの記録には、天使ガブリエルがマリヤを訪れたときの言葉が記されている。

「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます。

見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。

彼は大きいなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、

彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょう。」(ルカ1:28、31-33)

数日後マリヤは、いとこのエリサベツ(彼女は間もなくバプテスマのヨハネの母親になるはずであった)を訪れたとき、次のように言った。

「わたしの魂は主をあがめ、

わたしの霊は救主なる神をたたえます。

この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう。

力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。そのみ名はきよく、

主は、あわれみをお忘れにならず、その僕イスラエルを助けてくださいました。

わたしたちの父祖アブラハムとその子孫とをとこしえにあわれむと約束なさったとおりに。」(ルカ1:46-49、54-55)

マリヤの言葉から彼女の性格がうかがえ、彼女がイスラエルの歴史をよく知っていたことがわかる。また、自分を「卑しい女」と表現しているのは、恐らく、彼女の生活が貧しい境遇にあったことを物語っているのであろう。マリヤとヨセフは、イスラエルの王位を受け継ぐ者であったにもかかわらず、その名誉を行使する特権には恵まれなかった。ヨセフは明らかに、富も政治的地位もない、普通の人物だったのである。

確かにマリヤは、その尊い召しについての記憶を失ってはいたが、若い頃に、「みたま」が幾度となく彼女にささやきかけたことであろう。偉大な霊的能力に恵まれ、またそのため当然のように、義と黙想とに深い関心を寄せていたマリヤは、旧約聖書に関する知識や、神がイスラエルと交わされた契約と約束について深く考えていたに違いない。マリヤは確かに、彼女が受けたような神の召しを受けるにふさわしい、まじめな人であった。マリヤの人柄は、主の律法に長い間従順であったことから生まれたと言っても過言ではない。その心も性格も、ごく幼い頃から聖霊が彼女に働きかけて、その結果形成されたものなのである。

十二使徒評議員のブルース・R・マッコンキー長老は、次のように語っている。「キリストがひとりしかおられないように、マリヤもひとりしかいない。御父は、すべての霊の息子の中から最も気高く、最も義しい霊を選んで、御父の独り子として地上に送られた。同様に、御父はすべての霊の娘の中から最もふさわしく、最も霊的才能に恵まれた霊を選んで、永遠の御子の母親とされた、と断定すること

ができよう。」(ブルース・R・マッコンキー*Doctrinal New Testament Commentary* 「新約聖書の教義注解」 Vol. p. 85)

初期のキリスト教時代に書かれた聖書外典には、マリヤがイエスを身ごもる前に霊的に準備する期間を十分にとったということが、再三にわたって念入りに記されている。また、マリヤが、天使たちから指導を受け、他にも霊的な現われを数々受けたと書かれている(*The Lost Books of The Bible* 「聖書の遺失本」第1章および第4-9章参照、*The Apocryphal New Testament "The Gospel of Bartholomew"* 「新約聖書外典-バルトロマイ福音書」Oxford, The Clarendon Press 第2部 p.170-172も参照)。このような現われは、天使ガブリエルが訪れる前にも起こったと記録されている。

こうした詳細な記録の多くは、正確な記録とは言い難い。しかしマリヤは、御父御自らの現われに先立ち、かなりの期間にわたって霊的な準備と教育を受けていたと考えても、恐らく間違っていない。

イエスは、文字通り神の御子であったが、幼いときには他の子供たちと同じように、教えと保護を受ける必要があった。これは、イエスの誕生のとき、その心に幕が引かれて、一時的に前世での記憶が消されたために必要だったのであろう。ルカは、イエスが青年になるとますます知恵が加わった、と記録している(ルカ2:52)。教義と聖約には、肉身のイエスは「始めに完きを受けずして絶えず恩恵に恩恵を加えられ」(教義と聖約93:12)、と書かれている。ジェームズ・E・タルメージ長老も、これと同じ立場を取っている「イエスの心には、この世に生まれて来たすべての人と同じように、忘却の幕が降ろされており、それがために前の世の記憶は差し止められていた。」(「基督イエス」第9章) J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長も、「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」(“*Wist Ye Not That I Must Be about My Father's Business?*”, *Deseret News Press*, pp. 9-10, 12, 74, 81) という論文の中で、この問題を扱っている。とにかくそのために、マリヤとヨセフの責任は、さらに大きくなったと言えるであろう。

家庭で幼児の個性や態度に与える母親の影響の強さを考えるとき、天父がマリヤに御自分の選んだ愛子の養育をゆだねられたことによる、その責任の大きさがひしひしと感じられるのである。そのためマリヤには、前世での霊のときも、現世での処女のときも、十分な訓練が必要だったと思われる。だが、前世でこのような責任に召されていても、もしマリヤが地上に生を受けた後、清く汚れない生活をしなかったとしたら、神の御子を身ごもって、骨肉の体を与えるという業にふさわしくないと判断されたことであろう。

では、ヨセフについてはどうであろうか。御父は、マリヤの夫として、イエスの保護者として、またこの世での模範として、どのような人物を選ばれたのであろうか。聖典はこれについて何も言っていないわけではないが、直接的な記述は数少ない。父親には、教訓と模範とによって正しい原則を教え、助言者となるという義務がある。そのため、私たちの天父がヨセフを選ぶ際にも、十分吟味の末、選ばれたと結論せざるを得ない。ヨセフは霊的にも感受性に富んだ人であり、心優しい性格の人であった。このことは聖典の記録から読み取れる。ヨセフは、天使の現われや夢に

よって神からの導きを受けるに、ふさわしい人だった(マタイ1:20、2:13、19、23参照)ヨセフは、マリヤを決して当惑させることなく、また「彼女のことが公けになる」(マタイ1:19)ことを望まなかった。さらに付け加えるならば、ヨセフには、その重要な責任にふさわしい、確固たる道徳観と知性と社会性があったと言えるであろう。

マリヤとヨセフは、与えられた戒めをすべて、注意深く守った。モーセの律法では、数多くの行事や儀式が定められていたが、その中には、主とアブラハムとが交わした契約のしるしとして、すべての男の子は生まれて8日目に割礼を受ける義務があるという規則もあった。さらに男の子の場合生まれて40日目に(女の子の場合は80日目)、その母親は、特別な犠牲をささげなければならなかった。律法で、子羊か、2羽の山ばとが、家ばとをささげることにしていたのである。

また律法の規定によれば、最初に生まれた男の子は、主のために聖別し、犠牲としてではなく、主に仕える者としてささげなければならなかった。(出エジプト13:1-2、11-15参照) また、すべての男は、犠牲と供え物とを携えて、主を礼拝するためにしばしば神殿のある地へ行かなければならない、という規定もあった。(申命12:5-7、11-14参照)

新約聖書には、ヨセフとマリヤがこれらの律法をすべて守ったことが書かれている。ふたりは、イエスが生まれて8日目に割礼を施し、「それから、モーセの律法による彼らのきよめの期間が過ぎたとき、両親は幼な子を連れてエルサレムへ上った。」(ルカ2:22)

マリヤが、子羊ではなく、山ばとをささげたということから、彼女が経済的に貧しく、言わば「卑しい」境遇にあったことがわかる。さらに次のように書かれている。

「さて、イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上っていた。」(ルカ2:41) こうした記録から、この世におけるイエスの保護者であるこの両親は、従順で霊的な性格を持っていたという印象を受けるのである。

「正しい信仰深い」シメオンが、神殿でヨセフとマリヤに会ったのは、過越の祭のときであった。シメオンは、聖霊の力によって幼な子イエスがキリストであることを知り、マリヤに次のように言った。

「ごらんささい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています。――

そして、あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。――それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです。」(ルカ2:34、35)マリヤは、この言葉の意味を、これが成就する前も成就した後も、再三再四思いめぐらしたに違いない。この言葉は、イエスが十字架にかけられ、その脇腹を実際にやりで刺し貫かれるのをマリヤが見たときに成就したのである。しかしこのことは、1日で、あるいはひとつの事件だけで終わることではなかった。彼女は特別な霊ではあったが、御父は彼女に、苦痛や、人間であるがゆえの当然の結果を与えずにおくようなことはされなかったのである。マリヤも、死すべき人間にはつきものの困難や失望や葛藤を、身をもって体験したのである。

多くの点で、ヨセフとマリヤの時代は困難な時代であった。ユダはローマの束縛の下にあり、ヘロデ家の王たちは、無情で冷酷な君主であった。ユダヤ人たちは背教し、極端

な形式主義と靈的な暗黒とにつかっていた。当時のユダヤ人の宗教指導者たちは、「その罪深い行いと祭司の偽善売教とによって……世界の中で一番罪深い」（Ⅱニーフアイ10：3、5）と評されていたのである。

マリヤが、ヨセフに見守られながら初子を産み、飼葉おけの中に寝かせたとき、周囲の社会はこのような状況であった。聖き幼な子イエスに恵まれたこの家族の、外見を装わない謙虚な態度は、異教の国に征服されて、高慢で、かたくななパリサイ人やサドカイ人やラビ、律法学者たちに指導されている民の靈的に空虚な状態と好対照を呈している。イザヤは、この両者の隔りを予知し、救い主は「若木のように、かわいた土から出る根のように」（イザヤ53：2）育つであろうと予言していた。

イエスの家庭生活と少年時代のことについて、確かなことを知る手だてはほとんどない。だが、暗示的な箇所は数多くある。ヨセフが大工であったことはすでに述べた。そして、イエスも同じ職業についてわかっている。（マルコ6：3参照）その家庭には、律法に戒められている通り従順に主に従うという雰囲気満ちていた。イエスが、イスラエルの歴史について、また昔、主のみ手によってイスラエルの民が解き放たれたことなどについて初めて教えを受けた場所は、家庭であったに違いない。また家庭で、聖典に書かれている将来の希望と期待について学んだことも確かである。両親は毎週、安息日を守るために準備し、会堂の集会に出席し、祭の日を誠実に守り、毎年過越の祭にエルサレムへ上るために話し合い、準備を重ねていた。これを見ていた青年イエスには、これらのことが皆心の奥深く刻み込まれて、貴い教えとなったことであろう。

この家族に他に何人の子供がいたかについては、定かでない。しかし、新約聖書には、4人の兄弟の名前と、数人の姉妹のいたことが書かれている。これについては、ギリシャ語の原典が役に立つ。マタイ伝では、姉妹たちも「みな」（ギリシャ語はpantai）と書かれている。（マタイ13：56）これは、ふたり以上の姉妹がいたということである。さらにギリシャ語の原典では、この箇所にはhai adelphia（姉妹たち）という言葉が使われている。これは複数を意味しているが、ギリシャ語では3人以上ということである。もしここで、姉妹がふたりしかいなかったと記録したければ、恐らく、pantaiという言葉を用いずに、代わりに、「2」という意味のamphoteraiという言葉を用いたはずである。こうしてみると、ヨセフとマリヤの家庭には、明らかに少なくとも（イエスを含めて）5人の兄弟と3人の姉妹、合わせて8人の子供がいたことになる。それに両親もいたわけである。

このイエスの兄弟姉妹の身元について、大きくふたつの考え方があつた。そのひとつは、この子供たちは、ヨセフの前の妻との間にできた子供であつて、マリヤとの間に生まれた子供ではないという説である。この場合、イエスは他の兄弟姉妹たちより若く、血のつながりも全くないことになる。これは今日、キリスト教世界に広く受け入れられている考え方であつて、そのために「聖家族」の絵というと、決まってヨセフがマリヤよりずっと年上に描かれているのである。

もうひとつは、彼らは実際にヨセフとマリヤの子供であつて、イエスとは異父兄弟姉妹であり、イエスが長子である、という説である。どちらの説にも賛同者があり、聖典

の中にも、自説に有利になるように解釈できる箇所がいくつかある。しかしながら、イエスはマリヤの「初子」と呼ばれている。これは、後にマリヤが他にも子供をもうけたことを示唆している。（ルカ2：7参照）この子供たちがマリヤの子供であつたと思われる決定的な理由をひとつあげよう。ヨセフに妻から生まれた初子がいたとすれば、その初子がイエスに代わってダビデの王位の継承者になつたはずである。

マリヤは、何年間か、やもめとして過ごしたものと思われる。ヨセフについての記述は、エルサレムの過越の祭の場面が最後である。このとき、イエスは12歳であつた。カナに婚礼があつたとき、イエスは30歳であつたが、マリヤとイエスはこの婚礼に招かれていたと書かれている。しかしヨセフについては何も言われていない。（ヨハネ2：1-10参照）また、最後にイエスが十字架にかけられたとき、マリヤは十字架のそばに「他の女たちと共に」立っていたと書かれているが、ここでもヨセフについては何も言われていない。またこのときイエスは、母親の世話を愛弟子ヨハネにゆだねられた。（ヨハネ19：25-27参照）こうした一連の事件の記録から見て、マリヤはイエスの12歳以降、その伝道の業を始めるまでのあるときに、やもめになつたものと思われる。（マタイ12：46をも参照）

ある聖書外典には、極めて劇的に、ヨセフの死と、それについて話し合っているマリヤとイエスの姿が描かれている。

マリヤがやもめで、イエスより若い子供たちを皆かかえていたとしたら、これは大変なことである。そして、この仮説が正しければ、イエスはすでに若い頃から、やもめの母親と数人の弟と妹を養うという大きな責任を担っていたことになる。こうしてみると、主が特にやもめを心にかけて、御自身をみなしごの父であると言われるという聖典の言葉が、一層意味深いものになってくるのである。（詩篇68：5、146：9参照。ヤコブ1：27と比較せよ）

私たちはマリヤを礼拝することはしないが、マリヤに対して深い尊敬の念を抱いている。マリヤは女の中でも最も徳高く、気高い者のひとりである。またすべての母親のうち、最も恵まれた者である。マリヤは母親の典型ではないが、すべての母親にとってよい模範である。

耳を澄ますと、あの天使の言葉が、まだ聞こえてきそうである。「恵まれた女よ、おめでとう。」（ルカ1：28）また、マリヤの喜びの声も聞こえてくる。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。

この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう。」（ルカ1：46-48）

ロバート・J・マッシュューズ博士は、ブリガム・ヤング大学の古代聖典学の准教授であり、教会成人コーリレーション委員会でも働いている。

私は若かりし長老の頃、病児を祝福するために昔の初等協会小児病院へ行ったことがある。玄関に入ると、色鮮やかなほほえましいクリスマスの装飾が目に入った。廊下を行くと、小さな子供たちが笑いかけてきた。子供たちは、クリスマスのせいか、自分の足や腕にはめられたギブスや、そう簡単には治らない病気のことを、すっかり忘れていたようであった。

私はひとりの男の子のベッドのわきへ立った。その子が「だれですか」と聞くので、私は名前を言った。

「ぼくに祝福してくれるの？」と彼は尋ねた。私たちがその子を祝福し、それから立ち去ろうとすると、その子は「ほんとにありがとう」と言った。

そして2、3歩行くと、うしろからその子の呼ぶ声がした。「モンソン兄弟！」振り向くと、彼は「クリスマスおめでとう」と言って、にっこりと笑った。

その男の子はクリスマスの精神を知っていたのである。

クリスマスの精神は、若い人たち一人一人が、この季節に限らず一年を通じて、いつも心の中、そして生活の中に持っていてほしいものである。クリスマスの精神はキリストの精神であり、キリストのみたまであるから、クリスマスの精神を持つとき、それはキリストのみたまを持つことになる。

ある人が、クリスマスの精神について次のような言葉を

残している。至言と言えよう。

「私はクリスマスの精神。私は貧しい家に入って、青白い顔の子供たちに、驚きと喜びの目をみはらせる。私は守銭奴のしっかり握った指を開かせ、その魂に一点の光明を投じる。

私は年寄りに若い時代を思い出させ、楽しかりし昔に返ってほほえみを投げかけさせ、子供時代の冒険を思い起こさせ、数々の魔法の夢を鮮やかに描かせる。

私は人々に、贈り物でいっぱいのかごを手手に、暗い階段を勇んで登らせる。受けた者は世の善に驚きの声をあげるであろう。

私は放蕩者の荒れすさんだ生活を休止させ、気づかい愛する人々に、顔に刻まれた悲しみの厳しいしわを喜びの涙で洗い流す小さなしるしを贈らせる。

私は暗い独房に入り、やつれ果てた男たちに過去を思い起こさせ、将来のより良い道をさし示す。

私は静かな白い苦しみの家に入る。弱りきって話すこともできずに、ただ黙ってわななく唇は、感謝を雄弁に語り出す。

私は幾千も方法をもって、このうみ疲れた古い世に神のみ顔を仰がせ、みじめでささいなすべてのことをしばらくの間忘れさせる。そう、私は「クリスマスの精神」(作者不詳)

これこそ、私たちの持ちたい精神である。なぜならば、私たちはクリスマスの精神を心に抱くときに、この時節に

クリスマスの精神



生誕を記念するあの御方を思い出すからである。私たちはあの最初のクリスマスの日、いにしえの予言者たちの予言したクリスマスの日を思い出す。イザヤの言葉を思い起こそう。

「それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。」(イザヤ7:14)

イザヤはこうも語っている。

「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、……その名は……『平和の君』となえられる。(イザヤ9:6)

アメリカ大陸の予言者は言った。

「全能の主が勢い強く天から人間に降臨して土から成る身体に宿りたまひ……そしてこのお方は誘惑を受け、肉体上の苦痛……を経験したもう……

このお方は神の御子……イエス・キリストと呼ばれ……」(モーサヤ3:5、7、8)

そして、まさにその夜が来た。野宿していた羊飼いに主の使いが現われ、こう告げた。

「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。」(ルカ2:10、11)

羊飼いたちは主キリストを拝むために馬小屋へ急いだ。

博士たちは東方からエルサレムへ旅してきて、言った。

「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました。」

彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。そして、家にはいて、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬などの贈り物をささげた。」(マタイ2:2、10、11)

このときから、クリスマスの季節を祝うキリスト教徒の胸に、贈り物をする精神が見られることになった。それぞれにこう考えてみるとよいであろう。この大切な時期に、神や隣人にどんな贈り物をさせたいと、神は私に望んでおられるのだろうか。

私もその問いに答えてみたい。私は真心から厳粛にこう宣言しよう。私たちの天父はすべての子供たちに、心と思いと体力のすべてを尽くして主なる神を実際に愛する、その従順の贈り物を望んでおられるのである。そして必ずや主は、私たちが隣り人を、自分を愛するように愛することを期待されるであろう。

もしも主が今ここにおられたとしたら、自分を惜しみなく捧げるように、わがままにならず、どん欲にならず、争いを好まず、怒りっぽくならず、ニューファイ第三書に記録されている私の言葉を忘れないようにと、私たちをさとされることであろう。主はこう言われた。

「論争すべからず。まことに、まことに汝らに告ぐ、争いを好む心ある者はわれに属く者にあらずして悪魔に属くものなり。悪魔は……人々の心を煽動して互いに怒り争わしむる者なり。見よ、人々の心を煽動して互いに怒り争わしむるときはわが教義にあらず。わが教義はかくの如き怒りと争いとを止めよと言うものなり。」(IIIニューファイ11:28-30)

皆さんにお願いしたい。日常生活から争いの心を一扫し、お互いを、人生の利権をねらう相手と見る心を捨てて、兄弟姉妹として協調しつつ、イエス・キリストの福音の実をめぐすように。

このクリスマスの季節に、心の内にあって、外に表現されるのを常々待ちわびている感謝という気持ちを、私たちがぜひ忘れないように願っている。だれもが自分の父母を忘れることがないようにしようではないか。そうではなく、父母を敬うようにしなさい。息子や娘が神を敬い、神の戒めを守り、それによって父母に対する尊敬を示しているのを知ることは、両親にとって何よりのクリスマス・プレゼントである。

テキサス州コーパスクリスチで、あるときひとりの父親が誇らしげに私のところへやってきて、オーストラリアで伝道中の息子からだという手紙を私に握らせた。その手紙を読んでお聞かせしたいと思う。この手紙は、両親への今年の思い出深いクリスマス・プレゼントとして、感謝を表わすためのひとつの方法を教えてください。

愛するお父さん、お母さんへ

お父さんとお母さんがこれまでぼくのために下さったいろいろな素晴らしいことを、心の底から感謝したいと思います。長老たちが玄関をノックしたときに話を聞いて下さったこと、そして福音をしっかり守り、御自分の生活や子供たちの生活の糧として下さったことを感謝します。お父さんとお母さんを本当に愛しています。

ぼくをよく教えて下さったこと、いろいろな形で愛を示して下さいましたこと、ありがとうございます。正しい道に沿ってぼくを導き、強制ではなく、身をもって示して下さいましたこと。お父さんお母さんの素晴らしい証と、ぼくが証を持てるように愛をもって導いて下さったこと、感謝しています。ぼくは福音が真実であることを知っています。ここでのほんのわずかの経験で、ぼくは証を強めています。お父さんとお母さんの期待に添えるように祈っています。神様の助けによってそれができることでしょう。

もう一度、ありがとうございます。お父さん、お母さん。

息子 デビッドより

この青年は、この感謝の贈り物以上に素晴らしい贈り物を両親に贈ることができたであろうか。

両親だけでなく、兄弟、姉妹、親戚、友人、その他まわりの愛する人々にも同じ贈り物をしていただきたいと思う。彼らが真理を知って人生の危険を防ぐように、皆さんが自分を捧げてその助けができるならば、さいわいである。皆さんはほかの人の人生に燈をともし、日々つきまとう問題よりも自分の可能性に目を向けさせる人になることができる。

己れを捧げることは常に大切である。人を喜ばす心があり、人を勇気づける人生があり、人に分かすべき祝福がある。クリスマスの精神の意味は、次の救い主のみ言葉に表われている。

「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40)



よげんしゃ ジョセフ・スミス



よげんしゃのたんじょうび

1805年のクリスマスの2日前、バーモントしゅう、シャロンでジョセフ・スミスが生まれました。おとうさんの名前もジョセフ・スミス、おかあさんの名前はルーシー・マック・スミスでした。ジョセフは、このすばらしいかぞくの、3ばん目の男の子でした。かぞくは、かなしい目にもあいましたが、たのしいけいけんも、たくさんしました。

ジョセフはけっこんして、子どもが生まれましたが、かぞくだけではなく、そのほかの人たちもあいました。そして、いつもひとのために、はたらきました。あるとき、こういいました。「ゆうじょうは、モルモンのおんがいの教えの中でも、たいせつなもの、ひとつなのですよ。」

よげんしゃジョセフは、いつも友だちとたのしくすごしました。いつも家によんで、たのしいひとときを、すごしました。1843年のとくべつにたのし

かったクリスマスのことが、にっきに書いてあります。

「けさ1時ごろ、うた声で目がさめた。イギリス人のしまいルチス・ラシュトン、その3人のむすことそのつま、ふたりのむすめとそのおとと、それからなんんかひとびとが、『目ざめよ、てんしせとともに……』とうたっていた。よろこびが、むねにわきあがった。かぞくも、きんじょの人たちも、みんなおきて、そのうた声をきいた。わたしは、この人たちが来てくれたことを、天の父にかんしゃし、主のみ名によって、かれらをしゆくふくした。かれらは、兄のハイラムのところへも行った。ハイラムも目をさました。

ごごの2時、50組ぐらいのふうふがあつまった。

大ぜいのひとびとが、ようきに、そして、したしげにしょくじをし、おんがくをたのしみ、ダンスをした。



山の中の日よう学校



1849年12月9日、グレート・ソルトレークのぼんちで、さいしよの日よう学校がひらかれてから、今年で126年になります。そのたのしい日ようの朝には、やく30人の少年少女がリチャード・バレンタイン家の日よう学校に集まりました。そしてそのときから、何千という、せかい中のまつじつせいとが日よう学校のきょうしから、イエスが教えられたふくいんとあいについて、学ぶようになったのです。

ひょうがはげしくふって、リチャード・バレンタインのむぎばたけは、だいなしになってしまいました。ソルトレークのぼんちについて、はじめてうえたむぎでした。リチャードはひょうのふるなかで、ぶじだったほんの少しのむぎを大事にあつめました。前の年、リチャードと、つまのハルダと赤んぼうは、ぼんちに来るのがおそすぎて、作物をうえつけることができませんでした。冬のしょくもつになるむぎのかり入れを、どんなにたのしみにしていたことでしよう。

リチャードはがっかりしました。でもそんななかで、リチャードはふるさとのスコットランドのことを考えました。リチャードは、そこで教

会にはいったのです。ファウンズの小さな村の通りでは、日よう日だというのに、よごれたふくをきた子どもたちが、あそんでいました。リチャードは、そこで小さな日よう学校をひらき、その子供たちをあつめて、イエさまについて教えたのでした。

このあたらしい土地、たがやすのにも大へんだったこの地、リチャードは、かいたくしやの子どもたちのことを考えました。リチャードは、ふくいんをあいしていました。そして子どもたちを教えることがすきでした。リチャード・バレンタインは、このときのことをこう書いています。

「ふくいんは、とてもとういものだから、子どもたちにも教えなければならぬ。だれかが教えなければならぬ。子どもたちにふくいんを教えること、それをまずさいしよにしなければならない。——わたしはそうかんじた。」

リチャードは、かんとくに日よう学校をひらきたいと話しました。かんとくも、きょうかいのかんぶも、みんなリチャードのけいかくを、たすけてくれました。もちものを2だいの馬車につんで、リチャードのかぞくは、ひっこしました。しんでんのよてい地の、すぐちかくでした。

リチャードとハルダは、ひとへやの家をたて、馬車の中でくらししました。もう1だいの馬車は、ものおきにしました。

たべるものやきるものにこまらないとき、リチャードはしゅうかいじよにする小さな家をたてました。リチャードはミルククリーク・キャニオンに行って木を切り、せいぎいしょにひっぱって行って、それをざいもくにしました。家のどだいになったのは、レッドバット・キャニオンの石でした。かべは、町の西の方でとれるアドービレンガです。

日よう学校のへやは、たて6メートル、よこ5メートル半くらいのへやでした。うちがわのかべはしゅくいで、外がわはアドービレンガ、ゆかは木のいたで、やねはまるたでできていました。正めにまどがふたつあり、南がわに、まどがひとつとドアがひとつありました。そして大きなだんろがあり、がんじょうなベンチがありました。

バレンタインしまいは日よう学校のおんがくをえらび、レッスンを考えました。それから、へやのかざりつけをしました。

外はリチャードのかかりでした。リチャードは、木かげをつくるためにワタの木をうえ、おもしろいにわ木やブドウの木をうえました。家のまわりには、へいもつくり、冬が来るまでにはぜんぶできあがっていました。ひげのスコットランド人、リチャードは、きんじよの子どもたちを、日よう学校のあたらしい家に、しょうたいすることができました。

1849年12月9日、日よう日、朝8時、8さいから13さいの子どもたちが、やく30人、雪の道を日よう学校にやってきました。そこには火があかあかともえ、リチャード・バレンタインが子どもたちにあいさつをするすがたが見られました。リチャードは目をかがやかせながら、かいかいのせんげんをしました。そしてうたをうたったあと、心からおいのりをし、このへやを、子どもたちにイエス・キリストのふくいんを教えるために、ささげたのでした。

チロルのうた

きょうかいのオルガンが、こわれてしまいました。クリスマスまで、あと少ししかありません。オルガンのかわりに何でクリスマスイブのおんがくを、えんそうすればよいのでしょうか。

オーストリアの小さな村、オーバンドルフは、雪にうもれてひっそりとしていました。はれわたった夜空に冬のほしがキラキラとかがやく夜でした。ぼくしのジョセフ・モアは、雪をかきながら、もりの中の道をきこりの家へと歩いていきました。きこりのおかみさんは、赤ちゃんをうんだばかりなのです。たどりついたときは、もう夜ふけでした。チラチラもえる火の光にてらされて、お母さんになったばかりの女の人が見えました。おおいかぶさるようにして、ちっちゃな赤ちゃんを見えています。ちょうど、マリヤと、ベツレヘムの馬ごやで生まれたイエスさまのようでした。

モアは、しんとしずまりかえった、うつくしい冬のもりの中を、村へとひきかえしました。あたまの中に「きよしこの夜……」といううたが、うかんできました。家についてからも、モアの心はそのうたでいっぱいでした。ねることもわすれて夜明けまで書きました。

よく朝早く、モアは、このうたにきよくをつけられたらなあ、と思いました。そうです、しんゆうのフランツ・グルーバーがいます。グルーバーは学校の先生で、きょうかいのオルガニストもしていました。モアは、そのうたをもって、グルーバーの家へ走っていきました。グルーバーはギターをひきながら、二ぶがっ

しょうのきよくをつけました。

雪にうもれたオーバンドルフのきょうかいで、グルーバーのギターにあわせて、モアとグルーバーは、はじめて、このうたをうたいました。1818年のクリスマスイブのことでした。このうたが、せかい中の子どもたちの大すきな、「きよしこの夜」なのです。

このうたは、はじめ「チロルのうた」というだけで、4人の子どもたちが、うたっていました。ふたりの男の子とふたりの女の子の4人きょうだいでした。あるとき、この4人はライブチヒに行って、うたいました。そのうたが、あまりうつくしかかったので、コンサートでうたってくれるようにと、サクソニー王国の、おんがくのしきしゃが、たのみにきました。1850年には、ベルリンの王室きょうかいがっしょうだんが、フレデリック・ウイリアム4世の前で、このうたをうたいました。ウイリアム4世はたいへんよろこび、うたときよくを作った人にあいたいといいました。このときモアはもうこの世にいませんでしたが、フランツ・グルーバーは、このきよくを作った人として、そんけいされていました。グルーバーのギターは、今もハルバインのはくぶつかんに、かざってあります。

157年たった、ことしのクリスマスにも、ベツレヘムにお生まれになったイエスさまを思い出すために、せかい中の子どもたちが、うつくしい「きよしこの夜」のうたを、うたうことでしょうか。オーバンドルフのふたりの友だちどうしが作った、あのうたを。……





だいかんちょうかい 大管長会から

せかいのこどもたちへ

クリスマスは、とても楽しい季節です。みなさんだけがおくりものについて、考え
どんな思いがありますか。そして、こんどのクリスマスは、「そのひとり子をたま
マスには、かぞくやお友達だちといっしょに、どんなこわったほどに、この世をあいして」くださり、もはん
とをしますか。今から2,000年くらい前、ベツレヘムのをしめしてくださいました。

馬ごやで、イエスさまがお生まれになりました。このすばらしいものがたりをきくと、わたしたちはやさしい気もちになり、いじわるや、ふしんせつをゆるすことが、かんとんにできるようになります。

わたしたちは、クリスマスMASのきせつに、イエスさまのたん生を、おいわいします。イエスさまは今も、そしてこれからもずっと、わたしたちのお友だちで、いつまでもわたしたちを、あいしてくださいます。みんなをあいしてください。そして、みなさんがきぼうとしんこうをもち、元気で、きよく、明るくせいかつするよように、のぞんでいらっやいます。それは、かなしみにもつませいかつを、明るくしてくれるものだからです。

ときには、おくりものをあげるよりも、もらうほうがいいな、と思うこともあります。いうまでもなく、一ばんうれしい、すばらしいおくりものは、イエスさまのちです。イエスさまは、よろこんで、そのいのちをくださいました。むかしの人、今の人、そしてこれから生まれてくるひとびとが、いつかもう一ど、天のお父さまといっしょにくらせるよように。

クリスマスMASのたのしい一日がおわつたら、そして、おもちゃやゲームをかたづけけたら、みなさんがあいしている人を、しあわせにしてあげられるおくりもの、

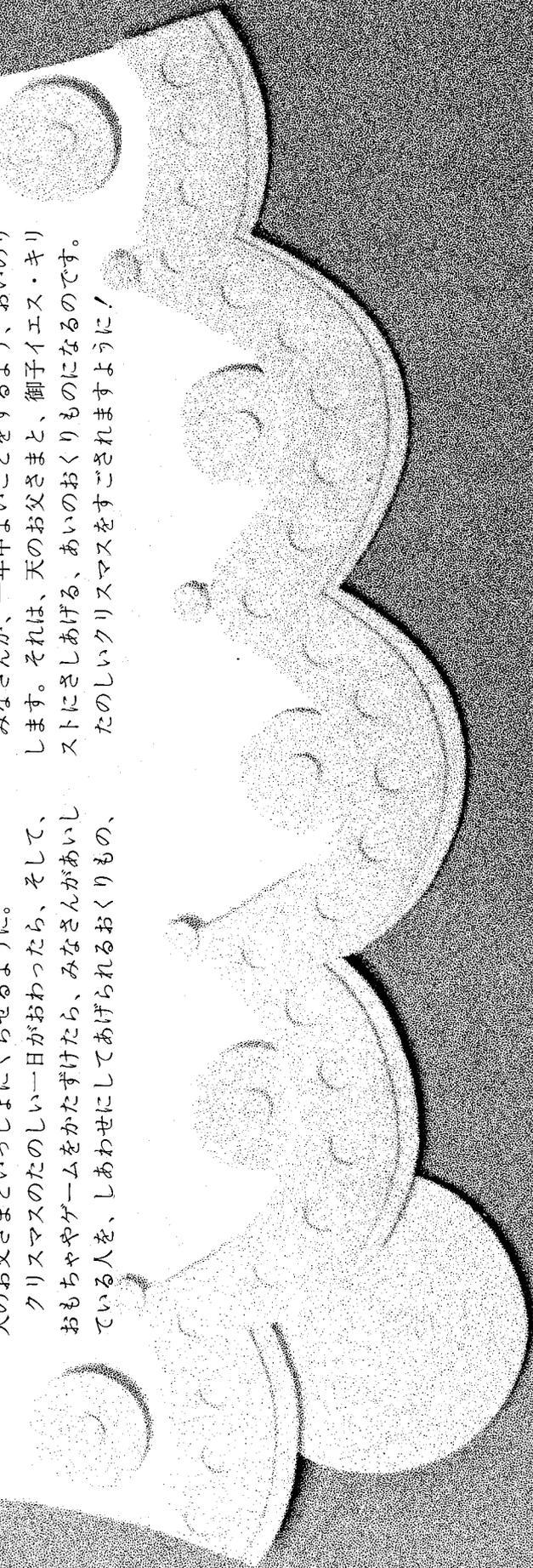
お父さんやお母さんにあげることできることもすばらしいおくりものは、「じゅうじゅん」というおくりものです。みなさんが正しいことをするとき、お父さんやお母さんのいうことをきくとき、お父さんやお母さんがかんじるこころふくなくもち、それは何よりもすばらしいおくりものです。

正しいせいかつをし、お父さんやお母さんをあいしていることをしめし、かんしやしてください。そのようにして、お父さんやお母さんをうやまうことは、きえてしまうことなく、いつまでもつづくおくりものです。地上のお父さんとお母さん、そして天のお父さんとお母さんにとって、みなさんはかけがえのない、たからなのです。地上の、そして天の父母のあいと思いやりは、いつまでもたええることがあります。

心から、みなさんをしゆくふくします。よいクリスマスをおかえてください。ひとびとに「何か」をあげて、こころふくになれますよ。そうすれば「もらうよりも、あげるほうが、しゆくふくが大きい」ことがわかるでしょう。

みなさんが、一年中よいことをするよう、おいのりします。それは、天のお父さまと、御子イエス・キリストにさしあげる、あいのおくりものになるのです。

たのしいクリスマスをお過ごしなすよに！





その夜、世界は しずけさにつつまれ

おはなし：ドロシー・レオン

これは、ほんとうのお話ではありません。でも、とおいむかし、ベツレヘムで、あったかもしれないことなのです。

むかしむかし、ベツレヘムの町にヨエルという男の子がすんでいました。ヨエルは馬の世話をしてはたっていました。いつもひとりぼっちで、かなしそうでした。もしもお父さんが、ポンチウスのようなお金持のやど主だったら、それともしょう人か、そうだ！もしも王様だったらどんなにいいだろう——よくそんなことを考えました。

「馬にかいばをやったり、水をのませたりするんじゃないなくて、もっとりっぱなしごとがしたいなあ。」ある日、ヨエルはお母さんに、こんなことをいいました。

お母さんはいいました。「どのしごとでも大切なよ。大切というのはどういうことなのか、あなたにもいつかわかるわ。」

ある夜のことで。ヨエルはしごとを終えて、外に出ていき、大きな岩の上に立ちました。そこからは、ユダヤのあちこちからやって来る、キャラバンの長いれつが見えました。こうていのめいれいで、ぜい金をはらいにベツレヘムに行くのです。



きのう、やど主のポンチウスから聞いたばかりです。ポンチウスは両手をもみあわせながらいきました。「キャラバンが大ぜいとまりに来るぞ、おあしをたんと落としていってくれるだろうて。」

大きな岩の上からは、ロバやヤギや牛が、石ころだらけの道をトボトボと歩いていくのが見えました。ラクダもいました。うつくしい足で、道のほこりをまきあげていました。やがて、やどやの中にはわは、ワイワイという人の声や、ひつじやロバの鳴き声で、さわがしくなりました。

太陽がさいごの光をなげかけて、ユダヤのおかの向こうにゆっくりしずむと、つめたい風がヨエルのほほをなでていきました。ヨエルはさむくなって、岩からとびおり、馬小屋の前で火をたいている友だちのところへ走っていきました。

とちゅうで、つかれているらしいふたりのたびびとがやどやの門をくぐっていくのを見かけました。せの高い男の人がロバをひいていき、ロバのせ中には、わかい女の人がのっていました。ふたりは、つかれているようでした。そして、かなしそうでした。

ヨエルは、その男の人と女の人を見つめました。ふたりのきものは、よごれていました。ロバのせ中の水ぶくろは、からっぽです。

「長いたびをしてきたんだらうな。」ヨエルはふたりのの方に歩いていきながら、こうひとりごとをいいました。

「やどやには、へやがないんだよ。この道をひきかえした所に、馬小屋があるそうだ。」男の人がいきました。

ヨエルはいいました。「ぼくがつれていってあげましょう。ここから近いんですよ。」

女の子はヨエルを見て、やさしくにっこりとほほえみました。

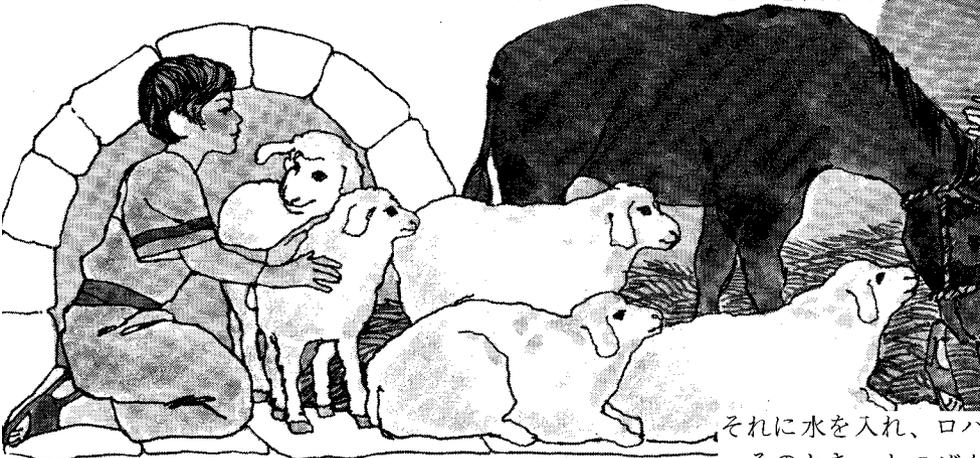
馬小屋に行くときに、ヨエルは、その男の人がヨセフという名前だということを知りました。ヨセフはナザレのだいで、ぜい金をはらうために、つまのマリヤといっしょにベツレヘムに行くのです。マリヤには、もうすぐ赤ちゃんが生まれます。とてもつかれていて、休まなければなりません。

ヨエルは、つかれているふたりを、馬小屋にあないしました。入口はひくくて、ヨエルでもかがまなければ入れませんでした。でも中には、小さいけれども、きれいであたたかいへやがありました。

「水ぶくろに、水を入れてきてあげましょう。」

「ありがとう、ヨエル。たすかるよ。きみのしんせつはわすれないよ。」ヨセフはいいました。

ヨエルは水ぶくろをもっていって、近くの井戸で、水をいっぱい入れました。ヨセフはマリヤに水をのませてやりました。それから、くらのふくろの中から、やきもののおさらを出して



それに水を入れ、ロバにもものませてやりました。

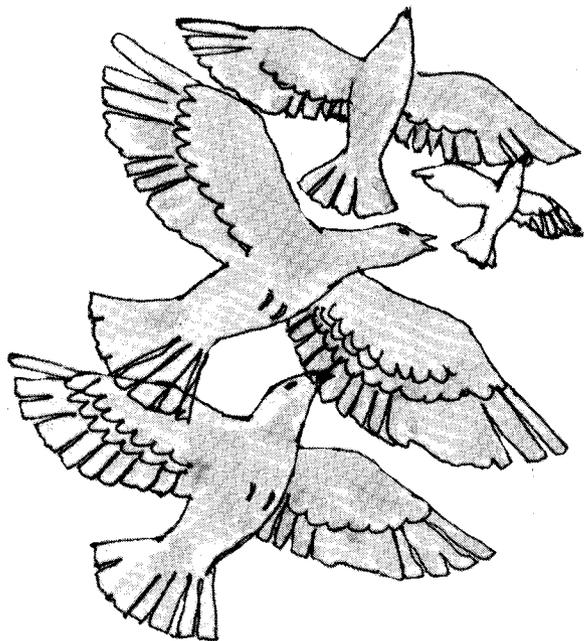
そのとき、とつぜんマリヤの声がし、ヨセフは中へかけこんでいきました。

ヨエルはヨセフを見ていました。急にあたりがしずかになりました。もの音ひとつしませんが、何も動きません。ロバさえも、しずかにしていました。ひつじも、草を食べもせず、じっとかがみこんでいました。もの音も、話し声もしませんでした。町のざわめきも、聞こえませんでした。

ヨエルがふと空を見上げると、ずっと高い所から、美しい歌声が聞こえてくるようでした。

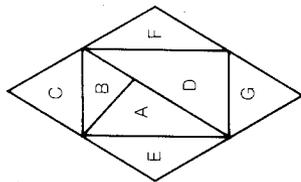
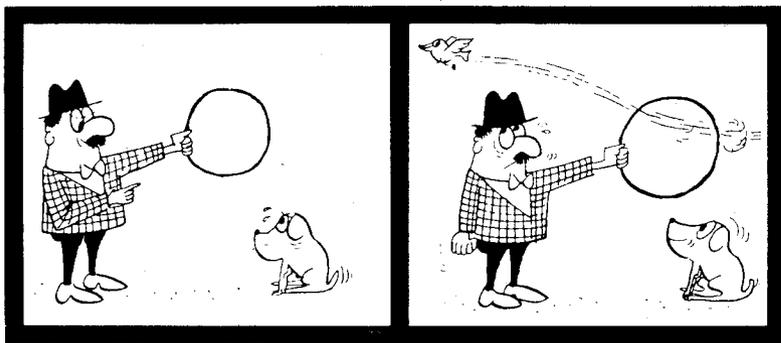
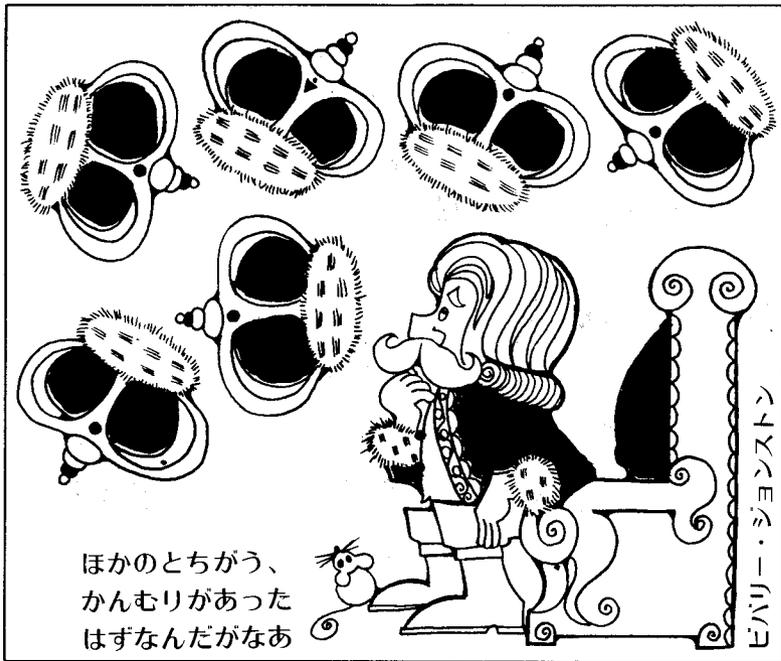
間もなくして、赤んぼうのなき声が聞こえました。ひつじは鳴きはじめ、コオロギも鳴き出しました。人々も話をはじめました。今まで、ひっそりしていたものが、いっせいに動きはじめました。

ヨエルは走って家に帰りました。ヨエルには、お母さんのことばがわかりました。「大切というのはどういうことなのか、あなたにもいつかわかるわ」といった、そのことばが。大切なこと、それは人に何かをしてあげることなのです。そしてヨエルには自分が、その夜、何かとてもたいせつなことをしてあげたということがわかったのです。





おもちゃばこ



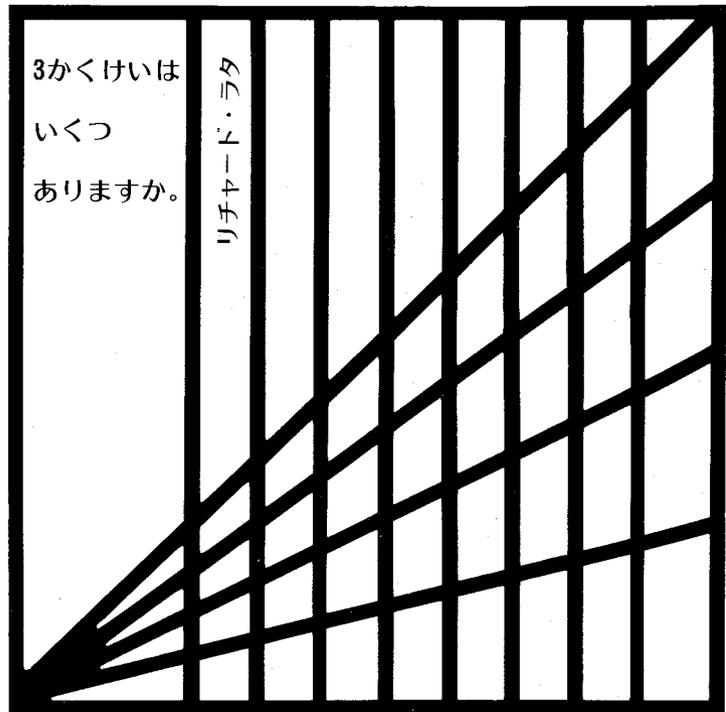
ダイヤモンドをつくりましょう

AからGまでの3かくけいを
きりぬいて、ダイヤモンドの
かたちにならべてみましょう。



3かくけいは
いくつ
ありますか。

リチャード・ラタ



日々の恵み

12個のクリスマス・

プレゼント

ジョイス・C・バクストラム

クリスマスと孤独は無縁なようですが、改宗して20年になるハンガリー人、エリザベス・ブランバーグ姉妹にとって、クリスマスはとても寂しいものでした。それまでのクリスマスはそうではなかったのです。子供たちがいて、ブタペストでもカナダでも、いつもながらのクリスマスを楽しんでいました。でもその年、ブランバーグ姉妹はひとりぼっちでした。みんなが不親切なわけではないのです。彼女はそれを知っていました。ただ、クリスマスにみんながあまりにも忙しすぎるのです。

ブランバーグ姉妹はそのような境遇を、ほかのことと同じように穏やかな気持ちで受け入れていました。年を取ったことや、耳が遠くなったこと、目がかすむこと、ご主人がいないこと、英語に不自由なこと、そして福音の愛をまだ教会員でない同居の娘家族にわかってもらえないことなど、どうしようもないほかのいろいろなことと同じように。

1973年のクリスマスがいつものように近づいてきました。ところが12月14日のことです。ドアをノックする音がして、入口にきれいな紙包みとカードが置いてありました。カードには、「クリスマスの最初の日にブランバーグ姉妹は何をごらんになりましたか？とてもきれいな鉢植えです。ひみつの友より」と書いてありました。

この年のクリスマスは、生涯でもまたとない思い出深いクリスマスとなりそうです。だれかが彼女のことを心にか

けていてくれたのです。

その翌日もノックがあり、別のプレゼントとカードが置いてありました。今度の包みにはクリスマスのろうそくが2本入っていました。だれかが、ひとりぼっちの年寄りの姉妹に、楽しい贈り物をしてくれたのです。それも一度ではなく、12回も。

贈り物は楽しい品ばかりでした。ツリーの飾りが4つ、花が5輪、サンタクロースの形をした石けんが6つ、クッキーが7個、棒キャンデーが8つ、その他いろいろ。最後のクリスマスの日には、玄関に12の小さなプレゼントを入れた赤いフェルトのストッキングが置いてありました。ブランバーグ姉妹が急いでドアをあけると、車に駆け込む少女の姿が見えました。

それから数週間して、ブランバーグ姉妹は、まったく偶然にあのひみつの友が若い女性のクラスの人たちだったことを知りました。やさしい少女たちをブランバーグ姉妹はどんなにいとしく思ったことでしょう。彼女はカードを宝物にして、心のこもった一つ一つの贈り物を思い出すたびに、喜びで顔をほころばせるのでした。12人のひみつの友だちは、クリスマスに人に思いやりの心を示したのでした。



ジョイス・C・バクストラム姉妹は現在、エドモントン・アルバートステキ部扶助協会の家族の健康教師、エドモントン第6ワード部家庭訪問教師を務めている。

聖典と朝食

ゲリー・J・コールマン

クリスマスの日が近かったが、弟のジェリーと私は、休暇中も働かなければ、来学期大学を続けることができないうことがわかっていて、それでふたりとも休みに入ってから1週間余分に働いて、それから休暇の終りまで帰省することにした。休暇中ジェリーの寮は閉鎖され、私のルームメイトは帰省するので、私はジェリーを自分のアパートに呼んだ。ふたりで計画を立てたとき、私は弟に福音を伝える機会があるように願っていた。

数週間前、私がバプテスマを受けて末日聖徒イエス・キリスト教会に入った2日後、私はジェリーの姿を大学のそばで見た。家族はみんな私の取った行動を心配していた。

「兄さん、やり抜くつもり？」 弟はそう聞いた。

「もちろんさ、自分のしたことは良かったと思っているよ」と私は返事した。

彼は私の目をのぞき込むように見つめ、「兄さんは一番



の兄貴だから、正しいと思わなければするはずがないよね」と言った。これには私も同時に、ほっと救われる思いであった。彼は私のことを無視してはいない。まだ私を尊敬してくれていると思った。

私はこの福音を学んでいた数ヵ月間、「どの教会が本当だろう」という疑問と闘った。私の家族は互いの結びつきが強かった。その長男として私は、弟や妹たちを指導するという自分の役目を特に自覚していて、自分のしていることは正しいという絶対の確信をいつも求めていた。ひとつの答えを求めて悩み苦しんだあの月日は、今でも記憶に鮮やかに残っている。そうした冬のある朝、その答えは穏やかに静かに主から与えられた。

その結果、私はジェリーに福音についてすべてを話して聞かせたいと思ったのである。しかしその計画にはひとつ障害があった。ジェリーは夜勤で、私は日勤になることだった。一緒になるのは朝食と夕食のときだけである。

その時間は何と敬虔になったことか。ふたりは毎日、自分たちの信仰についていろいろな問題を話し合った。そしてしばらくのためらいがあった後で、うれしいことに、ジェリーが真理を求める気持になってくれた。

クリスマス休暇は、一生でも最も充実した経験のひとつとなった。あのときの話のやりとりは決して忘れられない。私たちは、起きているほとんどの時間、台所の小さなテーブルで福音のことを討論して過ごした。霊のごちそうに比べれば、食事などはほんのつけ足しだった。

それから私たちは帰省したが、そのときに私は家族一人一人に対して新たな認識を持ち、家族に福音を伝える責任を痛感した。

ジェリーは3月にバプテスマを受けた。何と素晴らしい日だったことだろう。家族のひとりが、福音について自分が感じたと同じことを感じているのである。私たちは一緒になって喜び、自分の希望と兄弟姉妹たちへの関心を語りあった。私たちの絆は年々強まり、あれから姉夫婦がバプ

テスマを受けたり、死者のために神殿の儀式を受けたりして、福音の輪が家族に広がっている。

何年も前のあのクリスマスの季節を振り返るとき、福音を人に伝えることが、私たちにできる一番素晴らしい贈り物だということを今さらながら思うのである。



ゲリー・J・コールマン兄弟は現在、スポーケン・インスティテュート指導主事、ワシントンスポーケン東ステーク部第二副ステーク部長を務めている。

あるクリスマスの 出来事

ヘンク・チャードン

私の国オランダであった本当の話である。それはクリスマスの翌日、国では休日になっている日の出来事だった。初等協会の子供たちが、その日の午後、地域の病院に歌の慰問に行こうと決めていた。子供たちは教師たちと一緒に集会所のホールに集まった。数人の兄弟に車の手配を頼んであった。子供たちと教師と一緒に、これからの時間に祝福があるよう、謙遜に祈った。やがて病院に出かける時刻になった。

病院では、すっかり葉を落として寒々とした木々のわきの車寄せに、兄弟たちが車を止め、姉妹たちは雪道を転ばないで渡れるように子供たちを誘導した。一緒に歌を歌い患者さんたちと握手をし、クリスマスプレゼントを渡すはずを、だれもが承知していた。一行は病院へ入っていった。

兄弟たちは愛らしい合唱団が病院に入っていくのを見守ったが、しばらくして、ずいぶん長い間待っているのに気づき、ひとりが初等協会会長に尋ねた。「いつまでの予定なんですか。」彼女は返事をした。「5時には終わるはずなんですよ。そうでもなければ子供たちは疲れますから。」

するとジャンセン兄弟が言った。「どうですか。みなさん私の家にいらっしゃいませんか。この近くなんです。ぜひどうぞ。」兄弟たちは大型車一台に乗り込んで出かけていった。



子供たちが病院のベッドをまわって、澄んだ声でベツレヘムの星と幼な児キリストを告げ知らせていた間に、兄弟たちはひとりの兄弟の暖かい家で、クリスマスのお菓子をごちそうになっていた。彼らもベツレヘムの星と幼な児キリストの話をした。

それは非常に楽しいひとときで、彼らは時間をすっかり忘れていた。しかし運よく、5時少し前に駐車場に帰ることができた。ところが、その寒い車寄せに、アンドリース兄弟が立ち尽くしていた。彼も初等協会会長に自分の車を貸したひとりだったが、みんなと一緒に楽しい時間を過ごしていた間、ひとりで残っていた。

ひとりの兄弟がアンドリース兄弟に近づいていったが、彼は逃げるように背を向け、また別の兄弟が追いつこうとすると、足ばやに電話ボックスの中に駆け込んだ。「どうしよう」と友人たちは考え込んでしまった。「あやまらなくちゃ!」「他意があったわけじゃないんだ」、「置き去りにするつもりじゃなかったことを知ってもらわないことには。」

アンドリース兄弟は電話ボックスから出て、自分の車の方へ歩いていった。何人かの兄弟がまた後を追いかけた。「アンドリース兄弟!」しかしアンドリース兄弟は聞こえないふりをした。彼が車のドアをボタンと閉めると、ひとりの兄弟がドアをあけて言った。「アンドリース兄弟、本当にすまなかった。でも……」

アンドリース兄弟はひと言も言わず、反対側のドアから車を降りて、物も言えずにいる兄弟たちの前を通りすぎ、病院の中へ入っていった。

「本当に怒っているよ。」ひとりが言った。「そうだな。ぼくらが怒らせたんだ。」「しかし、話を聞いてくれさえしたら……」すると招待をした当のジャンセン兄弟が言った。「ねえ、君たち、ぼくが悪いんだ。行ってあやまってくるよ。」

しかし、アンドリース兄弟は彼を避けた。子供たちと教師が戻ってくると、兄弟たちは自分の車のドアをあけたり、子供たちをすわらせたり、教会まで運転して帰るのにかかりきりになった。彼らは子供たちと教師のはずんだおしゃべりを聞きながら、ますます気が減入ってくるのだった。「実にまずかったな。それもクリスマスだというのに。よりによって!」

ジャンセン兄弟は集会所でアンドリース兄弟をつかまえようとしたが、アンドリース兄弟は子供たちを降ろして、帰っていったところだった。

兄弟たちは額を集めて、どうしたものかと考えた。ひと

りの兄弟が言った。「思うに、アンドリース兄弟は非常に怒って、話し合う気になどとてもなれないんだ。」「すぐに彼の家に行かなくちゃ」と、別のひとりが言った。「しかし家にいるかな。どこかに行っているかもしれないよ。」「こんないやな気分はどうにかしてしまわなくちゃ、たまらんよ。」

もうすでに、子供たちはほとんど帰ってしまっていた。兄弟たちの中に奥さんが初等協会の教師をしている人がふたりいて、彼らがそれぞれの奥さんに、アンドリース兄弟の件を話した。そして兄弟姉妹は一緒にひざまずき、事態をうまく収拾できる良い言葉が見つかるようにと天父に願ったのである。

彼らは、はたしてアンドリース兄弟が自分たちを快く迎えてくれるか心配しながら、彼の家に向かった。「彼、奥さんに言ったかな」、「言うような感じじゃないね」、「着いたら何て言うんだ?」、「だれが出てくるかな。」

「仲直りのために来ました」というのが、代表者が言うつもりでいた言葉だった。5人の兄弟とふたりの姉妹は、不安な気持で戸口に立った。家の中には、この同じ寒さの中を1時間半も待って、すっかり気分を害した兄弟がいるのだ。

戸が大きく開け放たれた。そこには、アンドリース兄弟が歓迎の笑みを浮かべて立っていた。「どうぞ! 入って下さい。」

兄弟姉妹はびっくりしながら陽気な歓迎に応じた。

アンドリース姉妹や子供たちと挨拶を交わしたあとで、姉妹はちょうど良いときに来て下さいましたと、そのわけを説明してくれた。夫婦で七面鳥を買ってしまって、ひとつでいいのにふたつも食べる羽目になったということだった。「でも、私には偶然だと思えませんわ。ちょうど良いときに来て下さって、手伝っていただけますもの!」アンドリース姉妹はそう言い足した。

すぐに七面鳥の皿が出され、楽しいおしゃべりに花が咲いた。「万事はよし。」アンドリース兄弟は笑った。「クリスマスって素晴らしいわね」とアンドリース家の子供が言った。「みんな一緒って、すてきじゃない?」

主は祈りに答えられた。すべてが許されたのだった。

新年の第一日曜日の証会にアンドリース兄弟が立って証をした。「私は、彼らから忘れられたのではないかと思います。でも彼らは自分たちのしたことにとどうしても気が安まらず、償いをせずにはいられなかったのです。兄弟たちが帰った後で、私は心がまた暖かくなるのを覚えました。」



宣教師の母

ペトラ・G・デ・ヘルナンデス姉妹はメキシコ、モンテレーステ一キ部中央支部所属の未亡人である。4人の子供のうち3人が伝道に出た。彼女は心境をこう語っている。

ペトラ・G・デ・ヘルナンデス

私は、フロラルバ、ローザ・エリダ、ジュアン・セルジオ、デリア・パルミラという4人の子供に恵まれている母親です。今から19年前に、私の夫は交通事故で亡くなりました。そのとき私は子供たちを抱えて、自分を助けて下さる神様が必要だと感じました。末の娘はわずか11ヵ月でした。

子供たちとたったひとりで残された自分を思い、ふさぎこんでいたある晩、私はまるで人と話をするように、主に祈りました。人生の道を示して下さいと願いました。神様がおられることは知っているのですが、どこにおられるかがわかりませんとお話しました。真理を見つけない、きっと見つかることができるという願いと信仰をもって祈りました。あのときの祈りは決して忘れることができません。

その祈りの答えは、それからまもなくしてやってきました。ある朝ふたりの若い宣教師が家の扉をノックして、モルモン教会から、とても大切なお知らせを持ってやってきましたとおっしゃるのです。私はそれまでにモルモンのことは聞いていましたが、関心が全然ありませんでした。でもそのときはおふたりを家にお通しして、最初のレッスンをうかがいました。初めてのレッスンを受けたとき、私はおふたりの話は本当だと感じました。2回目のレッスンが終わると、おふたりの言っていることは何もかも真実だと感じる事ができました。それで私は子供たちと一緒にバプテスマを受けたいと申しました。おふたりはレッスンが全部終わってからとおっしゃったので、私たちはすべてのレッスンを終えてからモンテレー市のローマ礼拝堂でバプテスマを受けました。現在はモンテレーステ一キ部に所属しています。

福音を受け入れた日から、私たちの生活はまったく変わりました。今では神様が祈りを聞いて下さることを確認しています。私はすぐに伝道部初等協会の第二副会長に召され、それから会長に召されました。当時は一番上の娘だけしか働かず、大変な苦勞でしたが、アリゾナ神殿に行って結び固めを受け

ることができました。後でその娘はアメリカへ移り、同じ仕事の関係でイギリスに渡りました。娘はイギリスへ行ってすぐ後、監督からフルタイムの伝道の召しを受けました。彼女は一家の大事な働き手であることを自覚していたので、私にどう思うかと手紙をよこしました。私はその手紙を読んでいたときに、ひとつの聖句を思い浮かべました。それはIニーフай 3章 7節で、主は必ず従うための方法を用意された上で、子供たちに戒めを与えられるという言葉です。私は娘の手紙を読み終えるとすぐに、監督には伝道に出る準備はできていますと申し上げなさい。あなたは心配しないで大丈夫、と返事しました。私たちのことは、主が必ず守って下さるはずですから。

娘はアンデス伝道部に赴任しました。アンデス伝道部は当時、ペルーとチリとエクアドルを管轄していました。娘がペルーのリマにいたときに大地震が起きて、家は倒れ、多数の死者を出しました。娘と同僚の宣教師はそのときタクシーに乗っていましたが、ふたりともまったくの無傷で、怖ろしさに泣き叫びながら右往左往する群衆を目撃しました。彼女にとってそれは主が主に仕える者を守られるということを知った大きな経験でした。

娘は伝道期間中、心と精神と思いと力を尽くして働きました。そして伝道を終えると合衆国へ戻り、主は彼女に良い伴侶を恵まれて、オークランド神殿で結婚をしました。

もうひとりの娘のフロラルバが伝道に出たときには、主が私たちに必要なものをすべて祝福して下さり、足りないものは何ひとつありませんでした。

その後、息子のジュラン・セルジオがフルタイム宣教師に召されました。息子は管理機械技師の勉強があと2年を残すだけで、教会の召しもちょうど同じ2年でしたし、彼にとっては大きなチャレンジでした。彼は、1年半前にアリゾナ神殿でエンダウメントを受けていたので、私は彼に神殿で主と誓約を交わしたことで、自分は大神権者なのだということを忘れないでと言いま

した。主は今度は彼を、2年間ご自分の代表者として召しておいでなのです。息子はそれについて考え、祈り、友人や学友の反対を受けながらも宣教師になるという召しを受け入れました。彼はメキシコ西部伝道部(セニョール州ヘルモシヨ)に派遣されました。伝道中に息子の知識や証は成長しました。彼は2支部で支部長になりましたし、また宣教師として福音をまだ受けていない人々にお伝えするのはこの上ない機会だったと思います。彼は伝道から帰ると、ステーキ部の会計書記に召され、それから七十人に聖任され、次にはモンテレーステーキ部の書記に任命されて大祭司にも聖任されました。彼は、大祭司になることが非常に大きな責任であることを知っています。伝道で得た経験と強い証、それに主の靈感によって、彼は自分も主のみ旨を行なっていけることを知りました。来年には大学を卒業しますし、将来主からどんな召しを受けてもよいように、これからも自分を備えることでしょう。

息子が伝道から帰って6カ月後、娘のローザ・エリダがフルタイムの伝道に召されました。彼女は一度は役所に2年間の休職を願い出たのですが、後顧に憂いを残してはと退職を決意し、在職8年で得たものをそっくり失うことになりました。彼女はメキシコ西部伝道部へ送られました。

このような経験を通じて、私は主が私たちに恵み、主に仕える人々を祝福されるのを、この目で見てきました。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」という聖句を身をもって経験してきました。娘のデアア・パルミラだけが伝道に出ていませんが、それは、主が召されるかどうか、そして彼女が望むかどうかによることです。現在彼女は教師をしています。私は彼女が福音の証を持っていることを知っています。私たち家族の一致がこの福音によること、この福音を持って扉をノックして下さったあのふたりの宣教師のおかげであると、はっきり言うことができます。去年カ

リフォルニア州のオークランド神殿でバプテスマを授けて下さった長老に再びお会いできました。自分に福音を教えてくれた人に会うのは、口でばとでも表わせないほどの喜びです。

主は、人に仕えることが主に仕えることだとおっしゃいました。人に仕えるひとつの方法は伝道だと思います。シオンの母親にとって、伝道する子供を持つことは特権であり祝福です。主のみわざを手伝っているのですから。教会員の父母の義務のひとつは、伝道を支え、助け、子供を伝道に出すことです。子供が伝道に出るために何かの犠牲が必要かもしれません。でも、子供たちがどなたかの家の扉をノックするために、ある親たちが犠牲を払っていること、その扉の家のひとつがあなたやあなたの先祖の家だったことをどうか忘れないで下さい。私は自分の経験から、子供が伝道に出るには、いくらかの犠牲が必要なことを知っています。でも、犠牲が祝福をもたらすことも経験を通して知っています。主は適当なときにご自身のみ言葉を成就させるのです。

私は、この教会が真実であり、イエス・キリストによって導かれていることを知っております。私たちがまず神の国と神の義を求めらるなら、すべてのものが適当なときに添えて与えられると、はっきり言うことができます。それが真実なことを実際に経験したからです。私は、主が僕や予言者を通じて言ってこられたことを信頼しています。主がご自身や僕を信じる人々のためにことをなし遂げて下さることを、私はよく承知しています。

これは私のささやかな証です。世の富をどんなに積んでも買うことのできない証です。いつか主のみ前に立って、自分の一生と家族の生活の申し開きをしなければならないときがやってきます。私はそのときに、「主よ、私は自分の仕事をなし遂げました」と言うことができるようにと願っているのです。

影響を与える人々

十二使徒評議員会補助

ウィリアム・グラント・バンガーター

神が生きておられ、私たちの正しい祈りを聞き届けて下さることを知っている人には、神に仕える資格がある

私には今、出産を控えて分娩室に運ばれて行く妊婦のように、「私にはとてもできそうにありません」という気持がある。

先日、キンボール大管長は私と妻を面接に呼び、私たちがこれまで務めてきた奉仕の業を広げて、さらに世界中の人々と交わり、影響を与えることができるようにしたいという意向を述べた。驚いたことに、それまで私たちふたりが抱いていた私的な計画や抱負、それにこの世的な望みなどは一瞬のうちに消され、この地上で二度と考えることがなくなったのである。

ある朝、目を覚まし、今日は自分の35歳の誕生日であると感じたとき、私の脳裏を横切ったのは、「これで私も合衆国の大統領になれる年齢になった」という思いであった。しかしその直後に、もうひとつのつつましい思いが湧いてきた。「その通りだ。でも資格があるのは年齢だけじゃないか。」

今日、私が出ているひとつの資格とは、神が実際に生きておられるという快い確信である。すなわち、祈りを通して神と語り、神から幾度となく祈りに対する答えを受け、聖き「みたま」の影響力を与えられてきたということである。これはすべての末日聖徒が所有し、大切にしている資格である。

かなり前、私がステーキ部長に召されたときのことである。十二使徒評議員会のマーク・E・ピーターセン長老から、その職に就く資格があるかどうか面接を受けた。そのとき彼はきっぱりとした調子でひとつのことを私に尋ねた。「バンガーター兄弟、あなたは福音を信じていますか。」

私は自分が理解している範囲内では信じていますと答えた。

すると彼は「いいえ。私が言ってい

るのは、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長と同じ位に福音を信じていますかと言うことです」と言った。

スミス大管長が福音の教義を厳しく教えた方であることは衆知の通りである。従ってこの質問は、山羊と子羊を分けるように信仰ある者と信仰のない者を選分ける質問となったのである。私が感謝していることは、私を取り巻く人々の生活の中から数々の影響を受けてきたことである。その影響力のおかげで、福音がこの末の時代に地上に回復され、この教会の大管長がこの地上における神の王国を組織し導くための神権とイエス・キリストの権威を持った予言者であるという偉大な真理を、私は容易に受け入れることができた。

恐らく、私にもふさわしい資格がいくらかあったのだろうと思われる。私の職業は大工である。私は以前ジェームズ・E・ファウスト兄弟が、この職に就くにあたって、往々にして不評をかうことの多い弁護士の仕事をやめ、悔い改めなければならないと語ったのを記憶している。職業からすると彼ほどの悔改めを必要とはしないが、それでも私は同じように悔改めをしてきた。

私は両親が、私たち11人の子供たちをこのような奉仕の業に召されるにふさわしいように育ててきたことを知っている。私の母は、古代の予言者サムエルの母、ハンナの精神を受け継いだような立派な人である。子供たちが何の職に就こうとも、すでに彼らを主とのみ業のために捧げていたことを私は子供の頃から感じていた。私たちは伝道に出て、熱心に働き、しばしば祈り、奉仕のために私たちの生活を捧げるようになったのは、他のだれにもまして、両親の影響力があつたからである。ウィリアム・H・バンガーターとイザベル・ボーデンという名前が私にとって神聖なものである。それは私の兄弟、姉妹、親戚の者にとっても同

じことである。

人の一生はその人だけのものではない。私の親しい友人や愛する者たちがこの地球を取り巻いており、その中にはすでにこの世を去った者も数多くいる。私の愛する妻ミルドレッドも4人の子供を残して、すでに永遠の生命の道に入った。そして今ではその内のひとりもすでに母親と共にいる。また現在私には、愛する伴侶であると同時に奇跡の人でもある妻のジェラルディンがいる。彼女に対する私の気持は、ペリー長老が昨日述べた素晴らしい証と全く同じである。私たちの家族には新たに7人の子供が加わった。彼らはみな元気な愛らしい子供で、お互いに愛し合い、また私たちにも愛を示してくれる。私たちの生活は本当に恵まれている。その中の6人は今ヨーロッパにおり、私たちの帰るのを待っている。ほかにも私たちの周囲には少年時代、青年時代の仲間が大勢いる。また宣教師時代の同僚もいる。先程述べたファウスト兄弟とも、伝道地で一緒に働いたことがあつた。ほかにも、監督会、ステーキ部長会、伝道部長会、高等評議員会として共に教会の業に励んできた仲間たちがいる。その数は非常に多く、今思い出すことができないほどである。また愛する地区代表の方々、その中にはすでにその職を解任されている人も数多くいる。また折に触れて交わることができ、時には親密で個人的な友好を深めることさえできた教会幹部の方々。ほかにも教会の内外で、大勢の人々の恩恵をこうむってきた。特にブラジルの国民の間で親交を深め、共に働いた数年間の素晴らしい経験のことを述べておきたい。今日、この会場にもその代表者たちの顔を見ることができ、私が彼らとの交流、そのほか海外に住む人々との交流をどれだけ楽しみにし、また大切にしてきたか、言葉に表わすことができない。また私たちが家族のように親しくしてきた宣

教師も数百人にのぼるが、私たちは彼ら一人一人に愛と感謝の気持を示したいと思う。

ヨーロッパにおける不動産代理人として教会のために働いているピーター・モーリック兄弟から、以前次のような話を聞いた。あるときモーリック兄弟は間もなく出発しようという飛行機に乗り込んでいた。すると裕福な身なりのひとりの婦人がたったひとつだけ残っている彼の隣の席に着いた。すぐ前の席からは、先程からもくもくとタバコ煙のがたっていた。モーリック兄弟からは、「タバコの煙にわずらわされずに飛行機に乗れる日がくればいいですね」と隣の婦人に話しかけた。

すると婦人は「まったく、そうですわね」と答えた。

それからモーリック兄弟は何の深い意味も理由もなく「ジョセフ・フィールディング・スミスは神の予言者です」と言った。

すると婦人は彼の方に向き直って、記憶をたどるように繰り返した。「ジ

ョセフ・フィールディング・スミスは神の予言者？ ジョセフ・フィールディング・スミスは神の予言者？ そう、思い出しましたわ。あれはテレビを見ていたときのことです。大会でしょうか、ある宗教的な集会が行なわれていました。年老いた方が話しておられました。その方は私を見つめるようにして、私に罪を悔い改めて、神の戒めを守るように言われたんです。確か、彼の名前はジョセフ・フィールディング・スミスだったと思います。」

神のみたまは、このような力を通して人々の間で働くのである。同様に、何万という人々の耳に届くこの機会をいただいて、私も申し上げたい。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長やすでに亡くなった他の予言者に代わり、現在スペンサー・W・キンボール大管長が神の予言者であることを。私がこう言える理由は、1年前に彼が大管長になったとき、主のみたまがほとんど耳に聞こえるほどにはっきりと「彼は神の予言者として語っている」

と告げたからである。

私がこのことを告げるとき、主のみたまもそれが真実であることをあなたの方に告げている。キンボール大管長はこの教会の会員だけに与えられた神の予言者ではない。世界の人々にとっても神の予言者なのである。キンボール大管長は私たちすべてのために永遠の生命の言葉を伝える方である。福音が回復され、私たちは今、この末日に神の王国を築く業に励んでいる。私たちが悔い改めて、主に心向けられない限り、予言された災いと滅亡は必ず起こるであろう。この災いと滅亡によって人類が減びることのないように、神の王国が築かれているのである。彼はこれらのことを私たちに繰り返し告げている。

私はこれらのことが真実であることをイエス・キリストのみ名によって証するものである。
アーメン。



ウィリアム・グラント・バンガーター長老の 略 歴

十二使徒評議員会補助に召されたウィリアム・グラント・バンガーター長老は、1918年6月8日、ユタ州グレンジャーで、ヘンリー、およびイザベル・ボーデン・バンガーターを両親として生まれた。バンガーター姉妹は旧性ジェラルディーン・ハンブリンと言い、現在10人の子女に恵まれている。

教会におけるバンガーター長老の活動の中心はブラジルであった。1939-41年まで宣教師としてブラジル伝道部で働き、1958-63年にはブラジル伝道部長として再びあの広大な南アメリカの国で働くこととなった。

バンガーター長老は、1967年9月に十二使徒会地区代表の最初のグループのひとりとして召されて以来、南アメリカにおいて増加するステーク部や伝道部に指示を与えるために、しばしばブラジルを訪れた。

最初の伝道から戻ると間もなく、バンガーター長老はグレンジャーワード部の監督会で

働くよう召されその後アリゾナ州グラスワード部で大祭司グループリーダー、YMMIA会長を務めた。

ユタ州にあっては、オキールステーク部およびノースジョーダNSTEAK部Mメン指導者、ステーク部アロン神権書記、グレンジャーワード部監督、ノースジョーダNSTEAK部長、グレンジャーステーク部長、パイオニア福祉地区責任者を歴任した。

バンガーター長老はまた、教会ホームティーチング委員会およびソルトレーク・シティにある末日聖徒病院の理事会で4年間働いた。

ユタ州マグナのキプルス高校を卒業したバンガーター長老は、1948年ユタ大学で学士号を受け、後に同大学の大学院に進み、歴史学を研究した。また最初の伝道に赴く前にブリガム・ヤング大学に入り、第二次世界大戦時には空軍パイロット、飛行訓練中隊長となった。

自由意志

十二使徒評議員会補助

ロバート・D・ヘイルズ

召しに応じた新しい教会幹部一奉献の原則を顧みる

兄弟姉妹の皆様、この場でお話するのは私と私の家族にとってまさに一大事である。先に話されたシル兄弟に申し上げたいのだが、私は彼の話を必死になって聞いていて、このままずっと話が終わらなければよいと願っていた。

皆様方に私の生涯のひとつの出来事をお話したいと思う。それは今私の心をかけめぐり、またこの数週間私の心に去来した事柄である。発端となったのはマリオン・T・ロムニー氏からの電話であった。私が会議に臨んでいたとき、秘書がやってきて、こう言うのである。「マリオン・T・ロムニーさんからお電話でございます。」

「その方はマリオン・G・ロムニーさんだと思うが。」

「お話があることをお伝えすればおわかりいただけるのとことですが。」

「わかった。」

私の秘書はロムニー副管長の秘書に会議が終わったらこちらから電話すると言いたかったものと思う。電話に出ると、ロムニー副管長は5つの質問をしてこられた。私が伝道に出る意志があるかどうか、ふさわしい生活をしているかどうか、それに私の17歳になる息子のこと、家計の状態、健康のことであった。

これは私がずっと以前に学んだ自由意志に関係することであると申し上げたい。すなわち、5つの質問のどれひとつをとっても、もし私が否定的な返事をしなければならなかったとしたら、私は自由意志を失っていたであろう。私には経済力があつたし道徳的にもふさわしかった。私はまた、奉献の律法を知っていたし、その意味もつかんでいた、その機会に感謝した。

その後私はすぐ妻に電話をかけ、家に帰った。L・トム・ペリー長老がな

されたように、私も妻と話し合うためだった。これまで妻と私は、心をひとつにして結婚生活を送ってきた。妻は私について世界中を回り、これまでに引越した回数は15回にのぼる。その間、妻は2ヵ国語を身につけ、子供を育て、常に私を励まし支えてくれた。

海外旅行から帰ったある日のことを思い出す。しばらくぶりで我が家に帰り、妻はひじかけ椅子に座り、私はゆったりとした気持で彼女に寄りかかっていた。ところが妻は私にホームティーチングが終わっているかどうか尋ねてきた。月末が近かったのである。正直に話そう。ホームティーチングのことなど全く頭になかったのである。私はホームティーチングに出かけた。これが妻から得た訓練である。そのようにして、私は奉献の律法を体得するようになった。

ロムニー副管長から電話があつてから半月ほどして、再び電話があつた。今度は私が心から敬服している人、アーサー・ヘイコック兄弟からであった。彼との短いやりとりが終わると、それからすぐ予言者の特色のある、はっきりした、響きのある声が耳に入った。

「ヘイルズ兄弟、あなたの召しを変更してもよろしいですか。」

私はそれまで自分は英国ロンドン伝道部に行くものと思っていた。しかし、その召しはだれかほかの人が受けたのだろう。そう判断した私は、「大管長がお遣わし下さる所でしたらどこへでも喜んでまいります」と答えた。

「それがソルトレーク・シティーであつてもかまいませんか。」

「ええ、もちろん結構です。」

「それに3年よりも長いのですが。」

「大管長がお望みになられるなら何年でもよろしゅうございます。」

「私たちはあなたに一生涯働いていた、だきたいと思っています。」

その瞬間、過去の20年が私の前を飛

び去って行った。私は自分が崖から落ち、徐々に崩れていくへりにつかまって、祈りの中で必死に「助けてくれ!」と叫んでいる男のように思えた。はるか下の岩盤を見おろすと、はっきりとした力強い声が聞こえてくる。「行け、守られているから大丈夫だ。」それでも、男は再び崖の上の方を見上げて言った。「だれか上で私を引き上げてくれる人はいませんか?」

召しは明らかであった。私は自分の知識と生涯努力を傾けてきたことを捨てて十二使徒補助となることだったのである。

私はジョセフ・フィールディング・スミス大管長から奉献の律法について学び、それについて若人たちに話したことがある。奉献とは何も特別な出来事を指すのではなく、毎日自らの生活を捧げることである。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は私にこのように話して下さった。奉献とは、私の祖父のハイラム・スミスが予言者と死を共にしたように、私たちの生命を捧げることではない。奉献とは私たちの生涯であり、日々の生活であり、最善を尽くそうと努力すること、立派な生活をする、自分にでき得る最高の生き方をするのである。

予言者は私の妻にも話しかけて下さった。私たちは腕を組んだまま黙って彼の言葉に耳を傾けた。末日聖徒イエス・キリスト教会にあってその任務がどんなものであろうと、私たちはそのために自分の生涯を捧げ専念する覚悟であった。私たちはアシュトン長老が教えて下さったように自分に問うてみた。「なぜ私に?」しかし、召しを受けてしまったのだからそれは考えても仕方のないことである。

私はこのことを申し上げたい。私たちが自分の命を捧げるといふことは、死をもってでも、ある特別な出来事を通してでもない。私たちはそのことを毎

日求められているのである。

十二使徒会地区代表の任にあった過去5年余りの間、私は主の特別な証し人と呼ばれているこれらの方々を見つめ共に働くことによって、私の心の鋼に焼きを入れ、それを堅固なものにすることができた。彼らは接する神権者を知り、教え、訓練することのできる方々である。

あなたはこの方々がステーキ部が組織される日曜日ごとに啓示を受けておられることに気づいておられるだろうか。十二使徒会地区代表として、聖霊に代わって語る使徒たちの祈りに加わり共にひざまずくとき、私たちは共に、神が生きておられ、イエスがキリストであり、また今日この場に神の予言者と特別な証し人をいただいていることを知ることができるのである。この証し人たちは、その声に耳を傾けさえすれば、私たちを指導して下さるのである。

私は主に、これらの方々と同じように人々を高揚する模範となれるようにと祈り求めている。17歳の息子が私に向かってこのように言った。「お父さん、お父さんは本当に自分があの人た

ちのようになれると思っているの？」

もちろん実際はもう少し穏やかな言い方をしてくれたのだが。しかし私は自分の生涯を捧げることを考えたとき、すべての教会幹部の指示の下に働き、ひとつとなつて働くことができるよう助けを求めらるなら、主のみ手にある器になることができると思った。

コリント人への第一の手紙の中でパウロが宣言しているように、私は自分の生涯を捧げて奉仕する覚悟である。「そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によつたのである。

それは、あなた方の信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった。」(Iコリント2:4、5)

今日の私を築いて下さつたすべての方々の上に主の祝福があるよう祈るのである。初等協会、日曜学校の教師の方々をはじめとして、私に教え、私の生涯の模範となっている真に「善い父母」である両親、信仰と教会における奉仕の上で常に私の模範となつてき

た兄と姉、それに私の妻と息子たちである。息子のひとりスティーブンは伝道中であり、もうひとりのデビッドは私と共にソルトレーク・シティーに住んでいる。私にとって彼らは大きな力となっている。

私は主の祝福があつて、私が十二使徒の方々やすべての教会幹部の方々、兄弟姉妹の皆様方と目的の上でひとつとなれるように願っている。また私は神権者の方々に、皆様方のうちだれひとりとして今日この場に偶然集つておられる方はいないことを申し上げたい。人は「なぜ私に？」と考えるべきではない。それは考えても仕方のないことである。私は予言者が言われたように過去の生活を忘れ、時間と才能と努力のすべてを結集して主のみ業のために捧げる覚悟である。以上のことをイエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。



ロバート・D・ヘイルズ長老の 略 歴

ロバート・ディーン・ヘイルズ長老は、1932年8月24日にニューヨーク州ニューヨーク市でジョン・ルーロンとベラ・マリー・ホルブルク・ヘイルズを両親として生まれた。ヘイルズ姉妹は旧姓メアリー・エレン・克蘭ドールと言ひ、現在ふたりの息子に恵まれている。

ヘイルズ長老は1970年8月27日から教会幹部に召されるまで、十二使徒会地区代表として働いた。

彼は米国防空軍で働いていた関係上、合衆国、英国、ドイツ、スペインなどで教会に奉仕する機会を得た。

ヘイルズ長老はジョージア州のアルバニー、マサチューセッツ州のウェストン、ドイツのフランクフルト、スペインのセビリヤの各支部長、フランクフルト、シカゴ、ウェストンの各監督、ボストンステーキ部の副ステーキ部

長、ロンドン・イングランドステーキ部の高等評議員、マサチューセッツ州ケンブリッジの長老定員会会長を歴任した。またカリフォルニア州ダウニーではセミナリーのクラスを教えたこともあった。

ニューヨーク州ロングアイランドのグレイトネック高校を卒業した後、1954年ユタ大学を卒業し、1960年はハーバード大学から業務管理科の修士号を受けた。

また空軍ではジェット飛行士であった。

ヘイルズ長老はチーズブロウ・ポンド会社に入る前、マックスファクター社副社長、ヒューズ放送会社社長、ペーパー・メート会社社長を歴任、スペインにおいてはジレット安全カミソリ社の支配人、また英国、ドイツにおいては同社の販売取締役であった。

またヘイルズ長老はユタ大学の国家諮問評議会の一員でもある。

良い息子を持った母

十二使徒評議員会補助
アドニー・Y・小松



教会は私たちがよりよい人間となり、永遠の生命を得るために必要な教育の場を提供してくれる

私は皆様方に、イエス・キリストの福音が真実であることと私がこの教会に改宗したいきさつを、心からへりくだって証申し上げたいと思う。

私は34年余り前、まだ高等学校の学生だった頃、初めて宣教師に会った。その宣教師は私をMIAに誘い、バスケットボールのチームに入るようにと勧めた。教会のことは何も知らなかったが、私はバスケットボールが非常に好きだったので、MIAに集った。それから私は日曜学校にも、聖餐会にも出席するようになった。

1年間教会に集って宣教師と一緒に福音を勉強し、ジョセフ・スミスの見神の話を読んだ後、私はバプテスマを受けて教会に入るようにという誘いを受け入れた。その夜、私はバプテスマを受けようと決心して家に帰り、未亡人の母にバプテスマの許しを請うた。

母の目にあふれる涙を見た私は、なぜ泣くのかそのわけを尋ねた。すると母は「うれしくて泣くんじゃありませんよ。悲しいんですよ」と答えたのである。母にしてみれば、またひとりの息子を失ったと思ったからである。未亡人の母はすでにひとりの息子(私の兄)を亡くしていた。そこで、母は私までキリスト教会に取られてしまうと云った。後になって話してくれたが、母は父

が死ぬとき、子供たちを必ず立派な仏教徒にしますと約束したのだった。私はすぐ母に、宣教師たちと交わっていたこの1年間、いつも自分が高められ悪いことは何ひとつ学ばなかったことを話して、安心させた。

そして、もしバプテスマを受けた後、母を困らせたり、恥ずかしい思いをさせたり、不名誉な行ないをしたなら、教会に行くことを禁止してもよい、口答えはせずに母の望みに従います、と約束した。

しかし、その一方ではこう言った。もしよい人間になって未亡人の母を大切に、家族や弟や妹の面倒をよく見られるようになったら、こう言います。「ずっと続けて教会に行かせて下さい。教会は永遠の生命を受けるために勉強できる場所なのです。」

教会を離れる必要がなかったことと、母を心配させるような行ないをしなかったことが、今の私の証である。それからは、宣教師から教えられた福音の原則に従って生活し、自分でも原則を学んで、天父から、将来心配することは何ひとつないという確信を得た。

私はバプテスマを受けてから、ずっと福音の原則を実行してきた。マタイ伝のこの聖句は、私の好きな聖句である。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(マタイ6:33)

私はこれまでの教会員生活を通じて、

召しが来たときはいつでも決してその召しを拒まないように努めてきた。福音の原則に従って生活するとき、主は必ず祝福を与えて下さったのである。こうして、私は自分が持っている聖なる神権を正しく理解できるようになった。

今日世界に出かけている宣教師と同じように、ハワイを訪れて私に福音の原則を教えてくれた宣教師たちに感謝している。また私の交わってきた多くの教会員が福音の原則はもちろん、指導者としてのあり方をも教えてくれたことに感謝している。

また、私はモルモン家庭でひとつとなって生活してこられたことに対し、心から家族に感謝している。

私は今日皆様方に、へり下って証を述べたいと思う。私は神が生きておられ、私たちの祈りに答えて下さることを知っている。また、イエスはキリストであり、御父の生みたもう独り子、世の救い主である。ジョセフ・スミスはまさしく主の器であり、全人類の救いのためにイエス・キリストの福音を完全な状態で回復するよう委任されていた。

ジョセフ・スミスに続く教会の歴代大管長は皆、神から召された方であり、スペンサー・W・キンボール大管長はまさに今日の生ける予言者である。

これらの証をイエス・キリストのみ名によりへりくだり申し上げる。アーメン。

十二使徒評議員会補助

ジョセフ・B・ワースリン

家族と友人をたたえる新しい教会幹部

愛する兄弟姉妹の皆様、私はこの聖なる場に臨んで、光栄を感じると同時に心がへりくだるのを覚える。キンボール大管長から電話を受けたのは、1週間前

証に錨をおろす

の木曜日であった。「奥さんと御一緒に私のところに来ていただける時間はございませんか？」私は思った。時間ならあり余るほどある。しかし、予言者が一体私に何を？」

実際、私は取るものもとりにあえず大

管長のもとへ行った。皆様も私の立場に立ったなら、きっとそうされたと思う。私はキンボール大管長から自分の責任のことを聞いたとき非常に驚いたが、もちろんすぐに受け入れた。

大管長の事務所を去るときも私はま

だ動揺していた。一体自分に何が起こったのか全く信じられなかった。地震があったのは、それからちょうど3時間27分後のことであった。(その日地震があった。震源地はアイダホのマラドであったが、ソルトレークでも感じられた。) この地震で、はたと私は現実に戻った。

すぐれた人物のひとりであるブライアント・S・ヒンクレーは、何年か前、私の父について「今世紀まれに見る思慮分別を具えた人物であると」記している。(トーマス・カーライルより) 私はこの点について、キンボール大管長にも同じことが言えると思う。

子供の頃、私は父のひざもとで、謙遜で熱心な信頼できる人物になるように、僕である教会幹部を敬うようにという教えを受けた。私は家名を汚すまいといつも心に思っている。

私はこれまでの生涯をふたりの素晴らしい女性に囲まれて送ってきた。そのひとりである私の母は、私を産み、真理と義の道に沿って育ててくれた。家の中には霊性と愛と気品が漂っていた。母はどんな仕事をするときにも決して不正を許さなかったし、物事を成し遂げるのにただならぬと時間をかけ過ぎることのないようにと教えた。私の伴侶であり妻であるエリザは天父が創造されたひとときわ高貴なものひとりである。私は妻を愛し尊敬している。妻は絶えず献身的に私を支え励まして

くれた。彼女の性格はかのリベカのようであり、開拓者であった彼女の祖母のそれに似ている。妻は積極的で自己を克服できる人であり、完き信仰を持ち、福音で言う偉大な愛の持ち主である。私はいつも妻から靈感を受けてきた。私は妻を養い育ててくれた妻の両親に賞賛の言葉を送りたい。

私は8人の子供たちに感謝し、彼らを愛している。子供たちが正しい生活を送っていることは、私たちにとって喜びと幸福以外の何物でもない。また私は、教会や地域社会にあつて人々のために奉仕しておられる兄弟姉妹を心から尊敬している。

今私は、学校において、特に教会において私に遊ぶこと——実際は人生というゲームをどう行なうかということであるが——を教えてくれた体育のコーチと多くの立派な教師たちのことを考えている。私のプライマリーの教師はロムニー姉妹であり、私を宣教師に推薦して下さった監督はマリオン・G・ロムニー副管長であった。

今日、私は共に働いてきた教会での多くの立派な兄弟たちを思うにつけ、私を高める素晴らしい影響を与えてくれた彼らを心から尊敬しないではいられないのである。

教会の日曜学校の組織に私は非常な親しみを感じている。ラッセル・M・ネルソン会長をはじめとして、優れたふたりの副会長と有能で靈感を受けた

管理会の指導の下に、日曜学校は教会における伝道の業を実りあるものとし、また援助するために多くの働きをなすであろう。

スイスとドイツでの伝道は楽しかった。スイスのバーゼルを列車で去るとき、あふれる涙がとめどもなく頬を流れた。というのはそのとき私は自分の伝道期間が終わったことを知っていたからである。私は、彼らの持つ多くの優れた国民性からドイツの人々もスイスの人々も愛していた。私はきわめて厳密でありながら、それでいて非常に表現性に富んだ彼らの言葉が好きである。

私の生涯はまさに、神が生きておられ、イエスがキリストであるという証に錨をおろしている。私は自分の持つ神権を尊んでいる。私は病人を癒すとき、それに神権の大いなる力を見てきた。主のみたまは主の僕たちにささやきかけている。私たちにはそのささやきに耳を傾ける責任がある。私はこのことを知っている。私はきょう皆様方に、ジョセフ・スミスが予言者であり、彼を通してまた啓示によって、この偉大な教会が回復され組織されたことを証申し上げる。私はキンボール大管長と教会幹部である兄弟たち全員に対して、自分の生涯と働きを捧げることを心から申し上げたい。私は大管長の望まれる所に行き、この地上に神の王国を築くため最善を尽くす覚悟である。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。



ジョセフ・B・ワースリン長老の 略 歴

ジョセフ・ビトナー・ワースリン長老は、1917年6月11日、ソルトレーク・シティにおいてジョセフ・Lとマドリーヌ・ビトナー・ワースリンを両親として生まれた。

ワースリン長老の父親は9年半を管理監督として、14年間を管理監督会副監督として仕えた人である。

ワースリン長老はソルトレーク神殿において、旧姓エリサ・ヤング・ロジャーズ姉妹と結婚した。現在8人の子供に恵まれている。

ワースリン長老はイーグルスカウトであり、若い頃ドイツ、オーストリア、スイスで伝道

した。1947年にボネビルワード部の副監督になるまでは、ステーキ部やワード部の補助組織で働いた。1955年-64年にはワード部監督を務め、後にはボネビルステーキ部の高等評議員として働いた。1971年6月27日に日曜学校中央管理会第一副会長に召されるまで、ステーキ部の第一副ステーキ部長を務めている。

ワースリン長老は1941年、ユタ大学の商業経営学科を卒業した。ユタ大学ではフットボールチームのハーフ・バックとして活躍した。またボネビルナイフ・アンド・フォーククラブおよびソルトレークテニスクラブの会員でもある。



命の光を 受けて

岡町ワード部 伊藤 清

私は生まれたときから全然目が見えませんでした。子供のころ生活は貧しく、私も牛乳配達をして、家計を助けたことがありました。盲学校に通っていたときも、お弁当を持って行けない日がたびたびありました。そんな日は、みんなが食事をしているとき、そこを抜け出して音楽室へ行き、ピアノをたたいて時を過ごしていました。あるとき、それを知った先生が、「ピアノを練習しませんか」と声をかけてくださいました。それから正しい弾き方を学びはじめました。

ある日、私たちの学校に、駐留軍の米人が慰問にいらっしゃいました。先生は私にピアノを弾くようにとおっしゃり、彼らの前で演奏しました。会の後で、ひとりの米人が、「もしハモンドオルガンを勉強したいのなら、私が教えてあげよう」と申出てくださいました。その方は従軍牧師でした。

私は毎週彼からオルガンを習いました。彼は日本語ができませんでしたから、私が英語を勉強せねばなりませんでした。言葉はなかなか通じませんでしたが、私たちの心は通いあい楽しい日々を送っていました。

そんなある日、電車の中で、ふたりの外人から声をかけられました。彼らは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師でした。「教会に来て神様のことを勉強しませんか」というお誘いを受けました。私はさっそくこのこと

を牧師に相談しました。彼は「その教会は、私の教会ではないが、もし行ってみたいのなら私が連れて行って、そこの宣教師にあなたのことを紹介してあげよう」と言ってくださいました。それから私は福音について学びはじめました。人は生まれる前にどこにいて、なぜこの地上に来ているのか、また死んでからどこへ行くのかについて教わりました。

福音を勉強し、神様がおっしゃった戒めを守り、お祈りしました。やがてこれは神様の本当の教会にちがいないとわかり、バプテスマを受けました。

教会では私にオルガニストの責任をくださいました。讃美歌は見えませんが、どなたかに弾いていただいて、それを聞きながら覚えました。教会に行くとオルガンを弾き、兄弟姉妹と親しくおつき合える生活は、私に新しい人生をもたらしてくれました。身障者がたびたび外出するのを家族の者は喜びませんでしたが、私は教会に行くのを楽しみにしていました。あるとき、教会へ行く途中、電車を降りたところ、激しい雨に出会ってしまいました。雨の音とこれは急いで歩かねばとあせる心とで、私は道がわからなくなってしまいました。やっとの思いで教会にたどりついたときは、全身びしょぬれでした。しかしもっと悲しいことがありました。集会に遅れてしまったことです。私はからだか不自由なので、遅刻をしないように、いつも早めに家を出ていました。この日もそうでしたが、雨に打たれて道に迷い、とうとう開会に間に合いませんでした。オルガニストとして開会の讃美歌を弾く大切な責任を果たせないうみなさんに迷惑をかけてしまいました。兄弟姉妹にお詫びをしてから閉会の讃美歌を弾かせていただきました。

神様の福音と、兄弟姉妹の愛に助けられ、私は楽しい教会員生活を続けていました。やがて教会で知り合った姉妹と結婚し、子供にも恵まれました。夫として、父親としての責任も加わり、さらに充実した日を送っていました。

数年前大阪市で、目の見えない人々でも、角膜を移植すれば見えるようになるかもしれないと、移植希望者の募集がはじまりました。私もその検査を受けて見ようと思いました。私たち盲人にとって、もしかしたら目が見えるようになるかも知れないという知らせがどん

なものか、みなさんにはおわかりにならない
 と思います。200人ほどの方が、その検査を
 受けました。ほとんどの方は見えるよにな
 る可能性があるとの診断を受けました。しか
 し3人だけは、可能性なしの悲しい結果を知
 らされました。私自身もそのひとりでした。
 もしかしてとの希望をたち切るこの報告は、
 衝撃でした。同じ宣告を受けたひとは、私
 と同じように、家族もちの父親でした。もう
 ひとは、婚約者も決まっていた。しかし、
 この絶望の知らせを聞くや、ふたりとも、
 「もう人間をやめた」とばかりに、自殺して
 しまいました。家族や恋人を残して死を選ん
 だふたりのニュースは、私にとっても大きな
 ショックでした。私もそうしようかと迷った
 瞬間は確かにありましたが、すぐ打消してし
 まいました。なぜなら私は、なぜ私たちがこ
 の地上にいるのか、また死んだあとどうなる
 のかをよく知っていたからです。

宣教師から学びはじめた福音は、私があら
 ねばならない姿を教えていました。教会に行
 き、讃美歌を聞いたり、兄弟姉妹の楽しそう
 な声を耳にしていると、私の決心はまちがい
 ないことがわかりました。私たちは永遠に生
 きている神様の子供です。この地上での生活
 は、永遠の旅路の一部なのです。やがてこの
 世を去ると復活し、完全な身体になるのです。
 私は、このことが真実であると証します。

目を検査したお医者様は「あなたが生まれ
 るとき、大きな問題がありました。もし目の
 神経が傷ついているなければ、脳の神経がおか
 されていたでしょう」とおっしゃいました。
 私は、この言葉を聞いて感謝しています。も
 し目が見えても、理解する能力がなければ、
 神様のことを学ぶことはできません。でも幸
 い私は、真理を学ぶことができています。

教会に入って24年経過しました。その間多
 くの兄弟姉妹が、私に対して、また私の家族
 に対して、愛と親切を示してくださいました。
 私はこの愛と親切に、深く感謝しています。

確かに神様は生きていらっしゃる、イエ
 ス・キリストは救い主であることを証します。
 ジョセフ・スミスはこの御二方にお会いにな
 ったことを証します。この教会は、神様の真
 の教会です。私は目で見ることができません
 が、聖霊の力によってこのことが本当である
 と知っています。イエス・キリストのみ名に
 よって申し上げます。



『什分の一』と その祝福

名古屋第七支部 上田登美

「あら？」月のはじめに什分の一の
 用紙に記入しているとき、私はひとつ
 のことに気がつきました。何年前、高
 校を卒業したばかりではじめてもらっ
 た給料の中から捧げた什分の一の10倍
 相当の金額を今、私は書きこもうとし
 ていたのです。その月は勤め先（旅行
 社）の関係で招待された旅行を金額に
 換算して什分の一に加えたのでそのよ
 うな数字がでてきたのですが、それに
 しても今までに捧げた什分の一に対し
 てどれほど大きな祝福を受けて来たこ
 とでしょうか。

高校生のときに福音を聞いた私は什
 分の一はあまり大きな問題でないと
 思いましたが、いったん社会に出たとき
 自分の欲に負けてしまいある時期は正
 しい什分の一を捧げなかったことがあ
 りました。しかし聖典を読み、集会に出
 席し、いろいろな指導者の話を聞くう
 ちに自分の不正直さを感じるようにな
 り、悔い改めて正直な什分の一を主に捧
 げようと決心いたしました。そしてそ
 の正直な什分の一を捧げる決心をした
 月に昇給があったのです。

勤め先は小さなところでしたので、
 定期的な昇給というものはなく雇用主
 から「上田さん、今月から給料をふや
 してあげますね」といわれたとき、本
 当に神様が私に対して祝福を与えて下
 されたのだと思いました。またそのと
 きに昇給された金額は私が主に捧げる
 べき正しい什分の一と不正直で捧げた
 什分の一との差額と全く同じでした。

以来私にとって什分の一は最も守り
 やすい戒めとなっています。





J. HARSTON